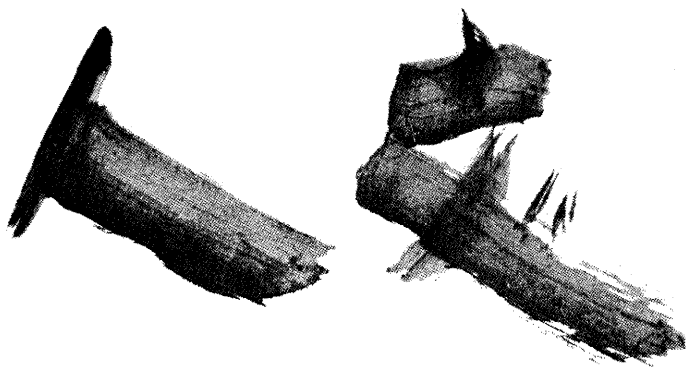




第四九号



2002

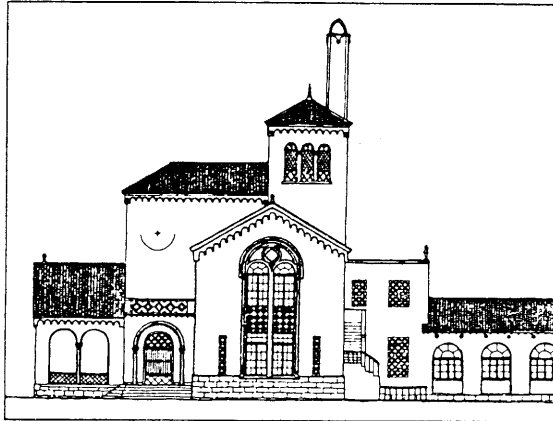
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 四 九 号

2001年 1 月—2001年12月

も く じ



随想

ルソーとフランス革命 阪上 孝
胸のすく思い 森 時彦
こぶ付きの半年 John Breen

講演

夏期講座——ヒトと環境のサイエンス
長寿のサイエンス（武田）／ヒトゲノムと新しい人間観
（加藤）／鳥は言葉を発するか——聞きなしを考える——
（小林）／北京…都市と環境（岩井）

開所記念講演

ポール・ヴァレリーと表象の危機（森本）／肖像と記憶
——横山大観《陶靖節》をめぐる——（高階）／明代
「嘉靖四十二年賦役黄冊」の語るもの（岩井）

集報

人文研の「たからもの」

北白川の収蔵庫

共同研究の話題

欲望のあいまいな対象 桑山 正進
「カール」と「カブール」 箭内 匡
進化論と「私」 稲葉 稔
「言語接触」研究の難しさ 北垣 徹
所のうち・そこ 中西 裕樹

「孝」の伝統と現代

キンゼイ研究所を訪ねて 菱谷 邦夫
国連反人種主義世界会議に出席して 田中 雅一
聖者の数 竹沢 泰子
日本人らしからぬと言われて 船山 徹
二股大根論序説 古勝 隆一
書いたもの一覧 菊地 暁

ルソーとフランス革命

阪上 孝

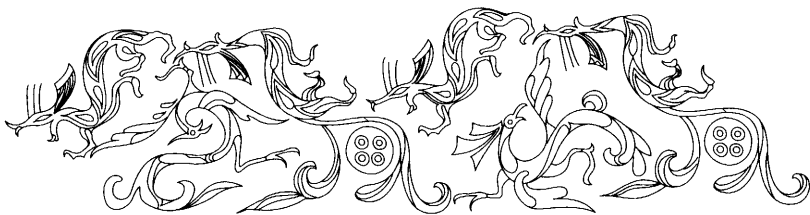
ルソーとフランス革命については多くの研究があるが、『フランス革命期の公教育論』を編むために『公教育委員会議事録』と『モニトゥール』を読んで出会った小さなエピソードを紹介しよう。

ルソーの未亡人テレーズ・ルヴァスールは、国民公会に二度請願を行っている。一度目は恐怖政治も終わりに近い一七九四年四月一四日のことで、ルソーの遺骸をエルムノンヴィルから移送してパンテオンに祀る請願である。同じ年の九月二六日、ルソーが彼女に遺した草稿の二つの包みを寄贈し、価値のあるものなら刊行してほしいと二度目の請願を行っている。当時は、ロベスピエールの文化財破壊（ヴァンダリスム）を攻撃し、散逸したり破壊された文化財の修復・収集が大きな政治的意味をもった時期だった。それに応えて、ルソーの草稿や書き込みのある著書が多数、国民公会や公教育委員会に届けられており、彼女の請願もこうした動きに沿うものであった。また、間近に迫ったパンテオンへの合祀の式典に臨席するという希望や金銭



的欲望も働いたであろう。

問題は、この草稿の包みにルソーの封印が押され、開封は一八〇一年以後とする旨が記されていることだった。国民公会議員のバレールは、啓蒙の進歩によって真理が力を得るまで開封を待つというのがルソーの遺志であり、その条件は革命の勝利によって満たされたのだから、すぐに開封すべきだと主張したが、反対意見も多く、結局、判断は公教育委員会にゆだねられた。翌々日、ラカナルが公教育委員会を代表して次の報告を行った。ルソーが自分の意志の尊重を願ったとすれば、この指示を自分で書いたであろう。ところで、この指示には「J.J. ルソー氏によって託された (Remis par M. J.J. Rousseau)」と書かれているが、ルソーは自分について語るときには決して *Monsieur* という語を付さなかった。したがってこの指示はルソー自身の遺志とは認められず、開封を禁じる効果はないというのである。たしかにルソーは手紙などにはほとんどの場合、J.J. Rousseau と署名しており、後の調査ではこの指示はルソーの最後の庇護者だったジラルダンによるものと推測されている。いかにも性急な判断ではあったが、結果は間違っていないかった。開封の結果、中身は『告白』全編の完全な草稿で、それまでの刊本では頭文字でしか記されていなかった人名がフルネームで書き込まれているなど、いくつかの興味深い書き込みがなされていた。この草稿は国会図書館に収められ、後に「パリ草稿」として知られることになる。しかし委員会の結論は、将来



『告白』の新版を準備するには有益な草稿だが、すぐに印刷するほどの意義はないというものだった。

ルソーの遺骸のバンテオンへの移送は、この年の十月九日から三日間をかけて盛大に挙行された。それは恐怖政治後の文芸復興を印象づけるための最初の国家的行事だった。それはまた、ルソーが歴史的存在として安定した位置を得たことを示す行事でもあった。テレーズ・ルヴァスールをこの行事に招待する動議が採択されているから、彼女もどこかで見ていたのだろう。しかしそのことについては何も記述はない。



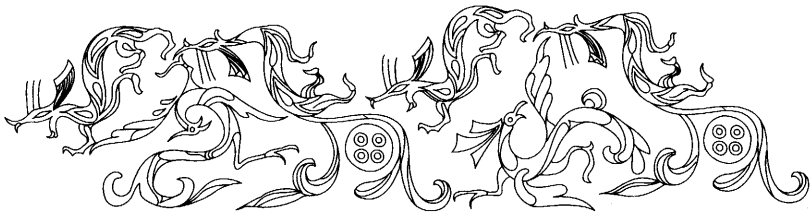
胸のすく思い

森 時 彦

丁文江、趙豊田両氏の編纂にかかる『梁啓超年譜長編』は、中国近代における最大の啓蒙家、梁啓超の五十六年におよぶ生涯を、書簡などの第一次資料で綴った一二〇〇頁を超す大部の書である。

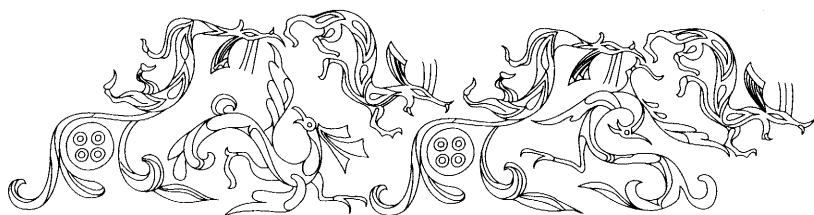
アジアで最初の共和国が誕生した中華民国元年（一九一二）は、立憲君主制を主張していた保皇派の梁啓超たちにとって、厄介事の多い年であった。海外における保皇派の衰退とともに、師と仰ぐ康有為との関係にまで亀裂の生じはじめた梁啓超のもとに、康有為を崇拜してやまない麦孟華から五月二十九日付けの詰問状が届いた。その書簡の中に「玉茗（？）」が日本から戻って来て、あなた〔梁啓超〕から、海外のわが党〔保皇派〕は今や百分の二、三しか残っていないという話を聞いた、と言っていました。初対面の相手に、どうしてそこまで打ち明けてしまったのですか」との一節がある。この「玉茗」とはいったい誰か。

故島田虔次先生の遺志を継いで、狭間直樹、井波陵一両先生

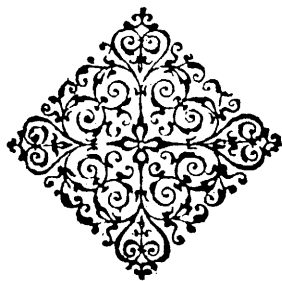


を中心に進められている『梁啓超年譜長編』の翻訳作業の過程で、このように緊迫した大事な場面でありながら、肝心の事が分からないといった隔靴搔痒のケースが頻出した。普通でも書簡の文面には、遣り取りしている本人たちにしか分からない表現がよくある。まして世界中を飛び回り、西太后暗殺の地下工作にまで関与したと目される梁啓超がこの時期に交わした書簡は、隠語はもちろん暗号のような表現まで入り乱れて、翻訳者をほとほと困らせる。昨年七月から半年間、中国社会科学学院近代史研究所の楊天石先生に外国人客員としてお越しいただいた目的の一つは、これらの手に余る数多の難問に直接お答えいただくことであった。

隔週ごとに三時間の質疑応答は、まことにスリリングで勉強になった。「玉茗」についても、これは湯覚頓あるいは湯化龍と推測できるが、おそらく後者であろうとの明察を下された。その謎解きのプロセスは、こうである。明代の湯顯祖という作家には、「玉茗堂四夢」と称される四種の有名な戯曲がある。この故事を踏んだ隠語だと仮定すると、湯顯祖と同じ湯という姓の人物を暗示していることになる。当時梁啓超と接触のあった湯姓の人物は、湯覚頓と湯化龍の二人であるが、「初対面の相手」との後の一句から推して、湯覚頓とは考えられない。案の定、同年四月三日付けの何天柱の梁啓超宛書簡に、湯化龍がこのころ日本に渡ったことが明記されていることも後に判明し、磐石の傍証が得られた。



分かってしまえばコロンブスの卵とはいえ、そこに到達するには、文史哲にまたがる博覧と鋭い洞察力、そして梁啓超をめぐる人間関係についての掌を指すような知識が、どれ一つとして欠かせないことは言うまでもない。帰国されてから一月余りになる今、楊天石先生の胸のすくような実証の数々を思い起こしながら、中国の碩学から直に学ぶことの大切さを改めて痛感するとともに、そのような機会がより多くなるよう願うこと頻りの今日この頃である。



こぶ付きの半年

John Breen

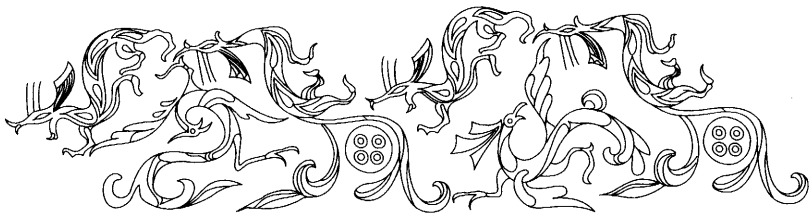
背伸びし過ぎた。人文科学研究所で半年の在外研究があれば、せめて二本ぐらゐの論文が書けるだろうと思っていた。希望的観測だった。一本で精一杯だった。書いた論文のテーマは文久三（一八六三）年に十四大將軍家茂が江戸を去って上洛して、孝明天皇に謁見を許された「事件」だった。幕末の歴史をやっている人なら誰でも知っている事件だが、それを研究した論文は不思議にも今までに一本もない。それだけでもやる価値があるでしょう。私は文化人類学で展開した儀礼論を応用して將軍の参内を理解しようと考えていた。謁見などの儀礼が権力と密接な関係にある、と儀礼論が指摘してくれる。幕末のように朝廷、幕府、諸侯などの権力関係が大きく動揺している時期こそ儀礼論を使って新しい光を当てることができると考えていた。付属図書館にあった『文久三年記』、宮内庁で見つけた『野宮定効公武御用日記』、日文献にある『維新史料稿本』などが主な素材となった。なかでも家茂の案内役をつとめた武家伝奏野宮の日記が謁見を詳細に記録したもので、それを元に儀礼を確



実に再現ができた。結論的に言えば、將軍の文久三年の参内が幕末政治史の一つの重要な——もしくは一番の——転換期をなす、というふうに私が考えるようになってきたのである。原稿にもう少し磨きをかけて『人文学報』にでも出そうかと思っている。説得力のある論旨かどうか、御教示をいただきたい。

今までの在外研究は東京大学の史料編纂所などで過ごしたので、京都はじめてだった。京都は予想以上に住みやすくて、京都人は排他的だと言われていたが、その気配がなかった。京都は環境的に拔群だった。第一、人文科学研究所の方々に歓迎されて直ぐに落ち着くことができた。名指ししていいかどうかわからないが、受け入れ教官を勤めて下さった高木博志さんはいつも研究のことで相談に載ってくださった。高木さんがいなかったら私の研究がはかどらなかつたに違いない。隣の研究室に幕末維新史の大権威でもある佐々木克先生がいて、史料などの面で大いに助けていたでいて、先生の斡旋で明治維新史学会で研究報告もできた。その他、横山先生、落合さんから多くのこと教えていただいた。人文は実に恵まれた環境で、感謝している。

私は独りでなく、こぶ付きで京都入りをしたので、研究一辺倒というわけには行かなかった。富山出身の妻、千賀にとつては数年ぶりの日本滞在だったし、存分に京都を観光して、友達もできて、それから実家の富山も直ぐ——相対的に直ぐ——だった。三男（一二歳）の Nicholas は物心がついてから始めて

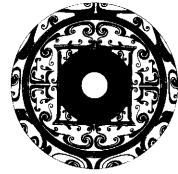


の日本旅行だった。Nicholasは修学院小学校に入れてもらって、すぐに友達を沢山作ったし、どういうわけか勉強をほとんどしなくて済んだ半年だった。最初、日本にきたくない、とさんざん文句を言っていた息子は半年して日本を發つ頃となったら、日本がいい、イギリスに帰りたくないと言っていた。次男のSimon（一九歳）も一緒だった。九月から年末まで京都の全日空ホテルでバイトをしていた。ホテルで彼女ができて、私達と一緒に日本を發つ計画をしていたのが棚上げとなつてしまった。しあわせなものだ。

私達Breen家にとっては京都での半年は一生忘れない、貴重な経験だった。研究にしても、何にして京都がいい、京大がいい、と全員で考えている。是非また来させて下さい！



講演



夏期講座 (二〇〇一年度)

七月六日—七日
於 本館大会議室

テーマ「ヒトと環境のサイエンス」

長寿のサイエンス

武田 時昌

人間の寿命はお金では買えない、誰しもが知っている格言である。平均寿命が世界一の日本では、保健衛生事業の推進によって社会的環境は整い、死に至らしめる伝染病を克服した現代医学の力で、ゆりかごから

墓場までの生命維持システムが構築されつつある。

だからといって、どの時代よりも健康に生きているという確信はないだろう。病氣と認定されなくても心身の不快感に悩み、精神的な安定性を大いに欠いている場合も少なくはない。古来より人々は長生きするための工夫を様々に追究してきたが、現代人のほうがむしろ長寿を保つ知恵に乏しいように思われる。

古代中国では、不死幻想による神仙思想とともに養生思想が大いに流行した。長生きすることに人生最大の価値を認めた最初の哲学者と言えば、老子である。

老子は、文明社会に背を向ける「無」の哲学を主張したが、同時に人為的営為を斥け自然の摂理に従って天寿を全うすることを究極の目的とする「生」の哲学を唱えた。そして、弟子のなから長生術を実践的に追究しようとする一派が分岐した。

先秦の養生思想については、七百歳を超えて生きたとされる彭祖の伝説が知られているだけで、具体的なこととはほとんどわからなかった。ところが、近年に長沙馬王堆漢墓や江陵張家山漢墓から医書、養生書が多数出土し、貴重な証言が得られた。

そこには導引行気や房中、服薬等の養生術の始原的な姿が描かれており、後世の道教における鍊丹術（外丹）や瞑想法（内丹）と比較すると、基本的なアイデ

アと理論の骨子は漢初までにすでに確立していたことが判明した、しかも『黄帝内経』が成立する以前の黎明期の医学と身体観を基盤とするものであった。

つまり、生を養う古代人の知恵は、本質的には変容することなく、ずっと後世まで時を超えて綿々と語り継がれていたのである。

今日において、長寿のサイエンスというのは、まだ成立していない。それを実現させようとすれば、医学の科学知識だけではなく、いかに健康に生きるかをめぐって様々な学問分野の文化的精華を結集する必要があるだろう。その時には、古代人の生を養う知恵に学ぶべきものが大いに存在するようになると思われる。

ヒトゲノムと新しい人間観

加藤 和人

二〇世紀の後半、生物学は飛躍的發展を遂げた。とりわけ一九七〇年代後半以降は、それまで微生物中心

だった研究が、植物や動物から人間にまで広がった時代である。その結果として人類は、おそらく科学史上初めて、遺伝子、細胞、形態などのあらゆるレベルで、自分自身である「ヒト」という生物を本格的に研究するようになった。今回の講演では、そうした研究から、どのような新しい「人間の見方」が生まれてきているのかを紹介することにした。

ヒトに一番近い生物は、チンパンジーやゴリラ、オランウータンなどの大型類人猿である。ヒト及び、それらの生物の遺伝子解析から、ヒトは、チンパンジーとゴリラに非常に近く、オランウータンとは遠い関係にあることが示された。ヒトと、ゴリラおよびチンパンジーの祖先の分岐は、それぞれ約七百万年前、五百万年前であり、三つの関係は、鳥類や他の動物のグループなら同じ属に分類されてしまうほどの近さであるという。この結果は、人間が早い時期に他の動物と分かれて進化してきたとする人類学の常識を覆すものだった。

世界中の様々な地域に住む現生人類の遺伝子解析からは、我々ホモ・サピエンスが、生物進化の歴史ではごく最近の、一〇〇二〇万年くらい前にアフリカで登場し、それまで存在したホモ・エレクトスと入れ替わる形で世界に広がったことを示す証拠が明らかになっ

ている。さらには、今から数千年前の、これまで考古学の対象だった時代の人骨のDNA分析も行われるようになり、例えば、二千五百年前の中国の山東省に住んでいた人々が、ヨーロッパ系の人類集団だったことを示唆する結果も出ている。「DNA人類進化学」と呼ばれる分野が、急速に発展しつつあるのだ。

昨年の二月に発表されたヒトゲノムの解読結果も興味深い。例えば、ゲノムの中で意味のある情報を記録している部分は全体の一・五％に過ぎず、残りは「ジャンクDNA」と呼ばれる意味のない配列であることが示された。対照的なのは、大腸菌や結核菌などのゲノムで、無駄な部分がほとんどなく、効率良く増えるのに適した構造になっている。ゲノムの効率性という観点からは、ヒトを含む哺乳類よりも細菌の方が高等なのである。人間や細菌が、そもそも生物として高専か、下等かと問うことは意味がないことを、ゲノム解析は教えてくれる。その他、ヒトゲノムの九九・九％は全人類に共通で、〇・一％が個人の違いであることや、人種という概念に対応する違いはないことなども明らかにした。

こうした「人間に関する生物学」は、まだ始まったばかりであり、現在のところ、歴史学や人類学以外には、直接に人文学とつながる成果は少ないかも知れない。

い。だが、今後十年、二十年の間に行われる研究からは、おそらく、人間社会の構造、人間行動の基盤などを理解するのに欠かせない重要な知見がもたらされ、より多くの人文学の分野に影響を与え始めるに違いない。生物学から生まれる「新しい人間観」に、多くの人文学者が興味を持つてほしいと思う。

鳥は言葉を発するか

——聞きなしを考える——

小林 博行

鳥は言葉を発するか。こう問われたときの答えはふたつ考えられよう。ひとつは鳥が言葉をもっていて、私たちには通じないとしても、たがいのあいだで言葉を交わし合っているとする考え方。もうひとつは言葉には人間の言葉しかなく、鳥の声は人間の驚きや喜びの声、あるいは悲鳴や怒号などとおなじだとする考え方である。

しかし例外的ながら、鳥が人間の言葉を発するかに

みえる場合もある。インコやオウムのように、人間の言葉をまねてそっくりに発音する鳥はおくとして、鳥の本来の鳴き声が、人間には言葉に聞こえることがあるからだ。たとえば私たちは、ウグイスの声を「法、法華経」と聞き、ホトトギスの声を「特許許可局」と聞く。このような「法、法華経」や「特許許可局」は、現在、聞きなしと呼ばれる。

よく誤解されていることだが、聞きなしは日本語だけのものではない。私が知りえただけでも、中国語、英語、ドイツ語、フランス語にはたくさん聞きなしがあるし、また東南アジアやアフリカ各地でも聞きなしが知られている。とはいえ、古い時代の聞きなしが文献にたくさん残っている点では日本語は特異かもしれない。そもそも「聞きなし」に相当する語は、ヨーロッパ諸語や中国語にはないようだ。

「聞きなし」という言葉ができたのは、日本で野鳥観察が普及しはじめた一九二〇年代である。また、かつては人の言葉についていわれた「聞きなす」という言葉が、鳥の声について使われはじめたのは江戸時代後半だった。江戸時代後半のある国学者は、鳥の声は人の声と隔たりがある、だからそれはさまざまに「聞きなさるべし」とのべている。

江戸時代後半は、国学者たちが音声の区別をしきり

に気にした時代である。鳥の声と人の声、また人の声でも日本語の音と外国語の音はちがうことを、彼らはことさらに主張した。近代になっても、野鳥愛好家は聞きなしを「翻訳」と呼ぶことがあったし、京大にいたある鳥類学者は自分でつくった聞きなしを「仮訳」と称した。これらは鳥の声と外国語の音を同列にみる考えの近代版といえよう。

聞きなしが翻訳と呼ばれることはいまはない。けれどもいま使われている「聞きなし」という言葉には、どこか寂しい語感がある。どうやら鳥たちは、仲間どうしで何かさえずっているのだけれども、人間にはそれがわからない。仕方がないので、自分の言葉で勝手に聞きなししているという含みを感じられる。

しかし、そう思うかたわら、それでもいいと私は思う。結局のところ、人間は自分にあるものを介して、自分以外のものにつきあつてゆくほかないからだ。このような関係は、ときに滑稽味を生じたり、ひどい誤解だつたりするかもしれない。鳥の声を外国語になぞらえてすむところではない。聞きなしは、自己と他者がいつもちぐはぐな関係にあること、とりわけ人間と自然の関係がそうであることを思い出させてくれる。

北京…都市と環境

岩井茂樹

北京は「砂漠の地であつて、風が起れば砂塵が天に漲なぎる」といわれる。大陸内部の乾燥地帯と湿润帯は、北京のあたりでせめぎ合つており、冬季には、まったく砂漠の地だというのが住民の感覚であつた。しかし、この巨大都市は、黄土台地から流れ出た永定河―潮白河がつくりだした扇状地に置かれたことによつて、豊かな水に恵まれていた。都市や宮殿が大きな水面を取り込むことによつて風致と開放感をもたらすばかりか、通惠河という運河によつて、中国を南北に貫く大動脈である大運河と都城内の湖沼とを接続し、水運の便を得ることも可能となつた。

扇状地であるから良質の飲用水も得られた。元代の文人王惲は、一二六三年に自宅のなかに深さ十一メートルほどの井戸をほつたところ、「わが心肺を潤す流すき、わが五臓を滌あら濯う」がごとき清冽な水が得られたのを喜んだのだつた。だが、同じ土地のうえに都市生活がつづくなかで、土壤は汚染された。すでに明代には水

質の悪化が顕著であつた。十八世紀になるとほとんどの井戸水は「苦水にがみず」となり、急須には三日とたたないうちに水垢がこびりついた。糞尿、生ゴミなどが土中で分解されて生じる硝酸塩が地下水を汚染し、健康に影響をあたえるほどの濃度に達したのである。良水の得られる少数の井戸は利権の的となり、そこから汲んだ水を木製タンク付き手押し車で売り歩く北京の水売り商売は、このような背景のもとに生まれた。

城内では、燃料の灰やゴミが捨てられたため道路部分の土かさが増していき、雨が降れば汚ない泥水が道から宅地に流れこんだ。現在の北京中心部では、数世紀にわたる都市生活が残したゴミや瓦礫まじりの土が二、六メートルほど堆積しているという。

十六世紀の人謝肇淛は北京での生活を「住宅は狭苦しいうえに、盛り場には糞穢が多い。各地の人間が雑処し、ハエやアブも多く、炎暑の時期にはもう死にそうだ」とか、娼妓や乞食が多いばかりか「奸盗が叢むらり錯あり、驅僧ブローカーが出没し、人間の不美の俗、不良の輩は京師にみなそろっている」などと苦情を述べたてながら、その一方で「このようでなくては京師たるに足らない」という言葉に納得している。活力みなぎる巨大都市は、不潔や混沌そしてアブナさのなかでのみ文化と経済の中心たりうる。これは古今にわたって真実であろう。

開所記念講演会（二〇〇一年度）

十一月十五日
於 本館大会議室

ポール・ヴァレリーと表象の危機

森 本 淳 生

世界貿易センタービルに旅客機が激突し、ビルが倒壊する——昨年九月十一日におきたテロ事件の映像は、テレビを見ていた少なからぬ人々にさまざまな衝撃を与えた。それにつづくアフガン戦争は、かつての湾岸戦争のようにニュース映像によって逐一報道されながらも、テロリストや炭疽菌といった「見えない」脅威を相手にするために、たえず表象不可能なものの存在を意識させるものであった。逆説的に言えば、映画のようにみごとなビル崩落の映像は、世界を表象することの綻びをシンボリックに表象していた、ということになるうか。

ポール・ヴァレリー（一八七一—一九四五）は、第

一次世界大戦後のヨーロッパを診断した「精神の危機」のなかで、ヨーロッパがもはや自己のイメージを喪失していると指摘した。近代精神はそもそも「断片化」したものであり、資本主義的な欲望のたえざる運動は、精神のみならず社会のありかたをも「無秩序」なものにしたと言う。社会を成り立たせている「信用」は危機に瀕している。恐慌は貨幣に対する信用の危機であり、歴史の教訓はもはや未来を見とおす役には立たない。平和という約束事が破られれば、戦争という「純粋な現実」が現れる。議会制度も官僚組織も本質を欠いた形式的な手続きに終始しているように思われてくる。社会が個人を越えた広がりを持つものである以上、それはさまざまな表象のシステムに対する人々の「信用」によって成り立っている。危機に瀕しているのは、この「信用」なのである。

独裁者が現れるのはそのような時である、とヴァレリーは言う。それは無秩序に対する秩序の要求であり、精神の抱く明確な自己表象への欲望である。ヴァレリーにとって独裁者は「頭脳」の統一性、「顔」や「人格」の統一性であった。この独裁は芸術家として、国家という作品を作るだろう。ここにはラクーーラバルトがナチズムに関して指摘した「国家唯美主義」と通底する問題意識がある。

以上のように「表象の危機」のメカニズムを見たヴァレリーは、自己をヨーロッパの表象となすことでこの危機に対処しようとする。いわば「ヴァレリー」という表象を作ろうとしたのである。それは伝統的フランス語とフランス詩を保存し、「ヨーロッパ知性」を代表する表象するものであった。そうした演技にヴァレリーはたえずアイロニカルな意識を持っていたが、それが危機に対する想像的解決でしかなかったこともまた確かなのである。ヴァレリーは解決策としてではなく、ひとつの問題としてわれわれにつきつけられている。

肖像と記憶

——横山大観《陶靖節》をめぐって——

高 階 絵里加

横山大観が大正時代に描いた屏風作品のひとつである《陶靖節》（水野美術蔵）は、金地の上の竹林を背景に、向かって左隻に陶淵明の姿を、右隻に無絃琴

（弦のない琴）と童子の姿を描いている。中国東晋時代の詩人である陶淵明の生涯とその詩は、文人の理想として古今の中国や日本の絵画に繰り返しとりあげられてきた。蕭統の『陶淵明伝』によれば、詩人は楽器は弾けなかったが無絃琴を一つ持っていて、酔ってよい気分になるとそれを撫でさすり気持ちを表したといひ、《陶靖節》はその逸話を絵画化したものである。しかしながら、大観の作品は、本来菊か柳か松とともに描かれるべき詩人の背景が竹のみであること、また詩人が無絃琴を傍らに置き撫でるのではなく琴から離れて立っていること、などの点において、伝統的な陶淵明の図像としても、大観がこれ以外に描いた陶淵明像と比べても、異例である。

大観がなぜこのような作品を描いたか考察するにあたり、童子と竹に注目したい。大観作品においては、《無我》や《村童觀猿翁》にみられるように、童子や子供は導かれるべき弟子としての存在を象徴している。そして頬に手を当てうずくまる童子のポーズは、大観も欧州旅行等で知っていたはずの、西洋美術の伝統における「憂愁（メランコリー）」を表す。また竹については、岡倉天心があるとき松を観山、竹を大観、梅を春草に擬して松竹梅として興がったという逸話が伝えられており、観山が松、大観が竹を描いた合作がい



「ボストン時代の岡倉天心と横山大観《陶靖節》（部分）」

くつも残されていることから、大観にとつては師である天心との強い結びつきを象徴するモチーフであった。天心と命運を共にすることで絵を生涯の仕事とする決意を固めた大観は、すでに明治三十一年の《屈原》において、官界を追われた孤高の詩人に天心をなぞらえていた。《陶靖節》が描かれた大正六年は、天心の七回忌にあたる年であり、この作品は師への追悼の思いを込めて描かれたものと考え得る。大正六年と七年には天心の命日に日本美術院の天心霊社前において莊重な追悼式も行われている。《陶靖節》の詩人の立姿は、ボストンで写された一枚の写真の中の道服姿の天心像と酷似しているが、自らの立場の表明として写真に写される自分自身のイメージにかなり気を配っていたと思われる天心自身が、在野の文人として自己を演出していた可能性も指摘されている。琴の弾けなかった陶淵明のように、天心は自ら絵筆をとることはなかったが、弟子たちの筆に託して新たな伝統としての日本美術にその思想を表明した。亡き師への追悼の念とともにその後継者としての決意もが感じられる《陶靖節》は、天心の持っている日本近代美術における偉大さを、改めて私たちに教えてくれる作品にほかならない。

明代「嘉靖四十一年賦役黃冊」の語るもの

岩井茂樹

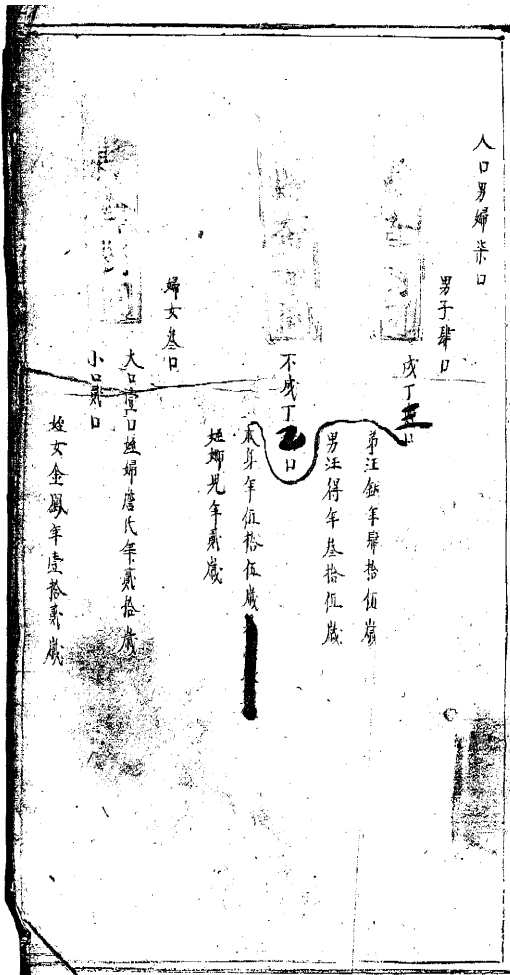
明代の「賦役黃冊」は、全国で五万から六万以上のぼった里（図）ごとに一冊、しかも十年に一度の改訂のたびごとに、副本もふくめて四部ずつ作成された。それらは地方官府と南京の後湖（現在の玄武湖）に保管された。十六世紀半ばの時点で、後湖の冊庫、計五四七間に、約二百万冊の黃冊正本が保管されていたし、州県、府、布政使司や各里にも膨大な数の副本があったはずである。しかし、これらはほとんど現存しない。

かつては京都大学文学部所蔵の明代の簿冊が、「嘉靖四十五年福建泉州府德化県の黃冊原本」であるとして知られていた。九〇年代から賦役黃冊について精力的に研究した欒成顕氏は、この明代簿冊を精査した結果、その体裁と記載が黃冊の制度に合致せず、これが泉州府永春県の保甲文冊であることを立証した。また、欒氏は現存の「黃冊遺存文書」を網羅的に研究し、その成果を『明代黃冊研究』（一九九八年）にまとめら

れた。しかし、「黃冊遺存文書」に数えられる十種ほどの文書・簿冊のほとんどは、「清冊供單」＝黃冊編造にさいして各戸より提出させた申告書、「抄底」＝黃冊の一部を抄写した簿冊、「底籍」＝里に保存された黃冊の下書きであって、黃冊原本である可能性を残すものは二種にすぎない。しかも、この二種には官印が押されていないことからすると、これを官府に提出され保管された「原本」であると断定することには躊躇を覚える。

岩井は、上海図書館で資料調査をおこなったさいに、一冊の明代の簿冊を見いだしたが、これはこれまでまったく知られていなかった「賦役黃冊」、すなわち嘉靖四十一年の黃冊改訂の年につくられた浙江嚴州府遂安県十八都下一図の黃冊のうち、第六甲に属する五戸分の記載からなる残本であった。毎葉のとじ目が正方形の官印によって「騎縫」されていることから、原本にもっとも近いものと推定される。また、黃冊の書写手とは別の筆跡によって、あちこちに加筆や訂正がなされており、各戸の「實在」の記載には、「本県査対同」「本県査不同」と読める長方形の印記が押されている。十八都下一図の里長あるいは冊書が作成した「里冊」にたいし、遂安県の官府の胥吏が点検を加えたものであり、正本や副本は、この加筆訂正を反映したものと

して作成されたのであろう。この資料は、そこから明代黄冊の冊の大きさや体裁、またその作成の過程をうかがうことができるという点で、これまで紹介されてきた簿冊をしのぐ価値を有するものである。



冊の大きさは約 50cm×25cm

文字は摩耗しているが、右下部に官印、項目上に点検済みを示す印記

彙報

(二〇〇一年一月より十二月まで)

おくりもの

。高階絵里加助教授は、第十八回渋沢・クロード賞ルイ・ヴィトンジャパン特別賞を受章(六月二十七日付)。

計報

。井上 清名誉教授(八七歳)は、十一月二三日逝去。

。福永 光司名誉所員(八三歳)は、十二月二十日逝去。

人のうごき

。加藤和人氏を助教授(人文学研究部)に採用(一月十六日付)。

。矢木毅(東方学研究部)助手は宮崎大学教育文化学部助教授に昇任(三月一日付)。

。狭間直樹(東方学研究部)教授は停年により退職(三月二二日付)、孫中山記念館館長に就任(五月二二日付)。

。瀧井一博(人文学研究部)助手は辞任

の上(三月三一日付)、神戸商科大学助教授に就任。

。上野成利(人文学研究部)助手は神戸大学国際文化学部助教授に昇任(四月一日付)。

。安田敏朗(人文学研究部)助手は一橋大学大学院言語社会研究科助教授に昇任(四月一日付)。

。小山哲(人文学研究部)助教授は大学院文学研究科助教授に配置換(四月一日付)。

。濱田正美神戸大学文学部教授は、併任教授(文化研究創成研究部門、四月一日)二〇〇二年三月三一日)。

。中谷文美岡山大学文学部助教授は、併任助教授(文化研究創成研究部門、四月一日)二〇〇二年三月三一日)。

。岩井茂樹(東方学研究部)助教授は当研究所(東方学研究部)教授に昇任(四月一日付)。

。宇佐美文理信州大学人文学部助教授は当研究所(東方学研究部)助教授に転

任(四月一日付)。

。稲葉穰氏を助教授(東方学研究部)に採用(四月一日付)。

。ウィツテルン・クリスティアン氏を助教授(附属漢字情報研究センター)に採用(四月一日付)。

。坂本優一郎氏を助手(人文学研究部)に採用(四月一日付)。

。藤井律之氏を助手(東方学研究部)に採用(五月十六日付)。

。石川禎浩神戸大学文学部助教授は当研究所(東方学研究部)助教授に転任(七月一日付)。

。宮紀子氏を助手(東方学研究部)に採用(七月十六日付)。

。高嶋航(東方学研究部)助手は大学院文学研究科助教授に昇任(十月一日付)。

。阪上孝(人文学研究部)教授を当研究所長及び附属漢字情報研究センター長に併任(十一月一日)二〇〇三年三月三一日)。

。村上衛氏を助手(東方学研究部)に採用(十一月一日付)。

。田中祐理子氏を助手(人文学研究部)

に採用(十二月一日付)。

。堂山英次郎氏を助手(人文学研究部)に採用(十二月一日付)。

海外での研究活動

。小牧幸代助手(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月九日成田発、大英図書館に於いて植民地行政資料の調査を行い、一月十九日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月十九日大阪発、香港城市大学に於いて南欧所在中国資料に関する研究打ち合わせ及び二〇〇一年PNC総会へ出席し、一月二一日帰国。

。安岡孝一助教授(漢字情報研究センター)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月十九日大阪発、香港城市大学に於いて石窟碑文情報の収集及び二〇〇一年PNC総会へ出席し、一月二一日帰国。

。真下裕之助手(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月二八日大阪発、アーンドラ・プラ

デーシ州政府東洋写本図書館、サーラール・ジャング博物館に於いてインド・イスラーム制度史研究に関する資料調査を行い、二月五日帰国。

。横山俊夫教授(人文学研究部)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二月二日大阪発、国立ソウル大学に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、二月五日帰国。

。金文京教授(東方学研究部)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二月二日大阪発、国立ソウル大学に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、二月五日帰国。

。武田時昌教授(漢字情報研究センター)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二月二日大阪発、国立ソウル大学に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、二月五日帰国。

。高嶋航助手(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月三日大阪発、上海社会科学学院に於いて

中国近代土地制度に関する史料調査及び研究打合せを行い、二月六日帰国。

。曾布川寛教授(東方学研究部)は、二月四日大阪発、故宮博物館及び歴史語言研究所に於いて中国絵画及び中国美術の調査と資料蒐集を行い、二月七日帰国。

。瀧井一博助手(人文学研究部)一月三十日大阪発、オーストリア国立図書館、Heinrich von Dahn-Rofelster 氏宅、ウィーン大学法制史研究所に於いて明治御雇いドイツ人法律顧問の研究のための資料調査及び意見交換、カール・ラートゲン関係資料の調査を行い、二月十三日帰国。

。古勝隆一(東方学研究部)は、文部科学省在外研究員旅費により、二〇〇〇年四月十五日大阪発、台湾中央研究院に於いて台湾所在漢籍の書誌学・目錄学的研究を行い、二月十四日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月十四日大阪発、香港大学及び中国国家図書館に於いて南欧所在中国資料に関する調査研究及び研究打合せを行い、

二月十八日帰国。

。田中淡教授（東方学研究所）は、二月十五日大阪発、ユネスコ北京事務所に於いて大明宮含元殿遺跡保存復元事業専門家会議に出席し、二月十八日帰国。

。山本有造教授（人文学研究所）は、二月十四日大阪発、スタンフォード大学フーバー研究所に於いて日中戦争軍事史コンファレンス予備会議に出席し、二月十九日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二月三日大阪発、ジャーミヤ・ミツリヤ・イスラミヤ大学、ニザームッディーン廊及びビジュノール県議会文書館（インド）に於いてインド・イスラームにおける聖者信仰に関する調査を行い、二月二四日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二月二五日大阪発、中国社会科学院考古研究所、遼寧省文物考古研究所及び文家屯遺跡に於いて遼東半島新石器文化の研究を行い、三月七日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文

部科学省科学研究費補助金により、三月五日大阪発、香港城市大学、西南民族学院、四川大学、澳門大学及び澳門文化局に於いてチベット語文語形式に関する文献調査研究打合せ及び資料蒐集を行い、三月十八日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十一日大阪発、ローマ国立中央図書館に於いて南欧所在中国資料に関する研究を行い、三月十八日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十四日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所及び国立台湾大学中文系に於いて中国近世俗文学資料の調査を行い、三月十八日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十日大阪発、バーゼルミツション（スイス）に於いて客家語資料の調査を行い、三月十九日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十二日成田発、ワシントン大学及び

国勢調査局に於いてアメリカ合衆国の国勢調査に関する調査及び資料収集を行い、三月二一日帰国。

。東郷俊宏助手（東方学研究所）は、三月十八日大阪発、上海中医药大学、岳陽医院、曙光医院、上海中医医院及び龍華医院に於いて中国老中医臨床実技の研究を行い、三月二九日帰国。

。富谷至教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月二五日大阪発、スウェーデン・ヘデン財団、王立アカデミー及びライデン大学中国学研究所に於いて流沙出土の文字資料英語版出版打合せ及び木簡に関する特別講演を行い、三月三一日帰国。

。宇佐美齊教授（人文学研究所）は、三月七日大阪発、トゥールーズ・ル・ミラル大学（フランス）に於いて二十世紀のアヴァンギャルド芸術運動についての講演及び研究打合せを行い、四月八日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月十九日大阪発、エジンバラ国際会議センターに於いてヒトゲノム解析機

構第六回年会出席及び調査研究を行い、四月二四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、四月二十日大阪発、台湾国家図書館に於いて第二次中文文献資源共建共享合作会議に出席し、四月二五日帰国。

。ウィツテルン、クリスティアン助教（漢字情報研究センター）は、五月二四日大阪発、東国大学（大韓民国）に於いて二〇〇一EBTI国際会議に出席し、五月二七日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月二五日大阪発、台湾中央研究院語言研究所に於いて消滅の危機に瀕した言語の調査についての打合せと資料収集を行い、香港城市大学に於いてチベットビルマ系の少数言語の調査打合せ及び資料収集を行い、六月三日帰国。

。ウィツテルン、クリスティアン助教（漢字情報研究センター）は、六月一二日大阪発、ニューヨーク大学に於いてACH/ALLC二〇〇一年度共同年会に出席し、六月十八日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文

部科学省科学研究費補助金により、六月十六日大阪発、マルチアーナ図書館（イタリア）に於いて中国学に関する南欧所在資料の調査研究を行い、六月二二日帰国。

。田中淡教授（東方学研究部）は、七月十四日成田発、大明宮含元殿遺跡に於いて同遺跡保存専門家会議に出席し、七月十七日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十六日大阪発、韓国政府記録保存所に於いて旧朝鮮総督府文書の調査・蒐集を行い、七月二一日帰国。

。ウィツテルン、クリスティアン助教（漢字情報研究センター）は、七月十八日大阪発、中華佛学研究所（台湾）に於いて仏典の電子化における諸問題についての検討を行い、七月二六日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、七月二二日大阪発、国立図書館、国立文書館及びアジア図書館（ポルトガル）に於いて十六ー十七世紀アジアにおける言語接触とキ

リスト教布教団の言語戦略に関する文献調査及び資料収集を行い、七月二九日帰国。

。真下裕之助手（東方学研究部）は、委任経理金により、七月二二日大阪発、国立図書館、国立文書館及びアジア図書館（ポルトガル）に於いて十六ー十七世紀アジアにおける言語接触とキリスト教布教団の言語戦略に関する文献調査及び資料収集を行い、七月二九日帰国。

。高嶋航助手（東方学研究部）は、五月十一日大阪発、上海社会科学院に於いて中国近代女性史の研究及び調査を行い、八月十日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十二日大阪発、法海寺、大同市博物館、雲崗石窟、繁峙県岩山寺、山西省博物館、天龍山石窟、開化寺、永樂寺、陝西省歴史博物館、敦煌市博物館、敦煌莫高窟、トルファン博物館、ベゼクリク石窟、アスターナ墓、トユク石窟、コーラ博物館、クムトラ石窟、キジル石窟及び故宮博物館（中華人民共和

国)に於いて中国美術資料収集及び壁書の調査を行い、八月十日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、八月五日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所、台湾国家図書館及び香港大学に於いて新旧キリスト教ミッシヨンの東アジアにおける出版活動に関する研究打合せ及び資料収集を行い、八月十一日帰国。

。岡村秀典助教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金(渡航費のみ)により、八月七日大阪発、国立故宮博物館に於いて黄河流域史前玉器學術検討会に出席し発表と調査を行い、八月十二日帰国。

。中西裕樹助手(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二二日大阪発、中央民族大学(中華人民共和国)に於て「シヨオ語」の調査及び資料収集を行い、八月十六日帰国。

。金文京教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十日大阪発、シンガポール大学図書館

に於いて元明代散曲に関する資料収集を行い、シンガポール大学に於いて現代小説国際學術検討会に出席し論文発表及びシンガポール俗曲関係資料調査を行い、八月十六日帰国。

。藤井律之助手(東方学研究所)は、八月十日大阪発、湖北省博物館に於いて出土文字資料調査、湖南賓館に於いて百年来簡帛發現与研究既長沙呉簡國際學術研討会に参加、景德から上海にかけての遺跡及び上海博物館に於いて出土文字資料の調査及び南朝関連遺跡調査を行い、八月二十七日帰国。

。池田巧助教授(東方学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二五日大阪発、香港城市大学及び西南民族学院に於いてチベット系少数民族語にかんする資料収集及び研究打合せ、康定県文化局に於いて言語調査、西南民族学院、香港城市大学及び香港理工大学に於いて調査資料整理、台湾中央研究院に於いて台湾の少数言語およびチベット系諸語の資料収集とデータ利用の打合せを行い、九月一日帰国。

。竹沢泰子助教授(人文学研究所)は、

文部科学省科学研究費補助金により、八月二四日成田発、キングズミード・タリケット・スタジアムに於いて移民の人権問題に関する共同研究打合せ及び国連反人種主義世界会議に出席し研究発表をおこない、九月三日帰国。

。小牧幸代助手(人文学研究所)は、八月二七日大阪発、カイロ、ダマスカス及びタインターに於いてイスラーム世界における聖者信仰と聖遺物の調査を行い、九月十五日帰国。

。高木博志助教授(人文学研究所)は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十一日大阪発、国立慶州博物館、国立中央博物館及びソウル大学(大韓民国)に於いて植民地期朝鮮に関する資料収集を行い、九月十七日帰国。

。山本有造教授(人文学研究所)は、九月十二日大阪発、国殤墓園に於いて国殤墓園に関する調査研究、西南聯合大学旧跡に於いて同旧跡に関する調査研究、中国社会科学学院に於いて日中歴史研究專家委員会との定期協議を行い、九月十九日帰国。

。北垣徹助手(人文学研究所)は、八月

二九日大阪発、レイモン・アロン政治研究センター（フランス）及びフランス国立図書館に於いてフランス第三共和政期における教育思想にかんする文献調査及び資料収集を行い、九月二十日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究部）は、委任経理金により、八月三十一日大阪発、サンフランシスコ大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、イリノイ大学及び国会図書館に於いてアジアの民俗文化についての文献調査を行い、九月二十日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月六日大阪発、北京図書館、山東大学、南京図書館及び上海図書館に於いて中国近世戯曲・小説・類書の資料調査を行い、九月二二日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十八日大阪発、台湾大学理学院地質科学研究所に於いて海峡兩岸古土学会議で発表及び中国出土玉器の調査を行い、九月二二日帰国。

。籠谷直人助教授（人文学研究部）は、四月一日大阪発、ロンドン大学政治経済学院に於いて一九三〇年代日英交流史研究を行い、九月二三日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、九月十九日大阪発、延辺大学及び延辺自治州档案馆に於いて「二一世紀朝鮮民族古籍の発掘と研究」に関する国際学術会議に出席及び資料収集調査を行い、九月二六日帰国。

。東郷俊宏助手（東方学研究部）は、財団法人京都大学教育研究振興財団助成金により、六月二九日大阪発、ケンブリッジ大学ニードム研究所及びライデン大学に於いてヨーロッパにおける鍼灸医学伝播に関する資料蒐集及び調査を行い、九月二八日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月一日大阪発、海豊県県誌弁公室に於いてシヨオ語の調査及び資料収集を行い、十月十三日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十月十六日福岡発、武漢

市内に於いて記念辛亥革命九十周年国際学術討論会にて研究報告、武漢大学及び湖北大学に於いて近代中国に関する研究打合せを行い、十月二十日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、十月二四日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いてバーチャルシステム・マルチメディア（V S M M）国際学会とテキスト・エンコーディン・イニシアティブコンソーシアムの文字問題WGに出席し、十月三十日帰国。

。守岡知彦助手（漢字情報研究センター）は、十月二四日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いてバーチャルシステム・マルチメディア（V S M M）国際学会とテキスト・エンコーディン・イニシアティブコンソーシアムの文字問題WGに出席し、十月三十日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、十一月一日大阪発、国立中央博物館に於いて植民地期文化財保護史料の閲覧及び資料収集を行い、十一月三日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、十

一月一日大阪発、中正大学、逢甲大学、故宮博物院（台湾）に於いて二世紀敦煌学国際学会に出席し、十一月七日帰国。

。曾布川寛教授（人文学研究部）は、三月二日大阪発、上海博物館、故宮博物院、国家文物局に於いて中国美術の調査及び資料収集を行い、十一月六日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、十一月六日大阪発、コルトナ市内に於いて国際会議「Emotions and Analysis of Historical Sowses in China」に出席し研究発表を行い、十一月十一日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月九日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて中国語方言データベースの視察及び資料収集を行い、十一月十八日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、十一月十四日大阪発、ドモグラントホテルに於いて文字問題に関するT.E.I総会に出席し、十一月十九日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月七日成田発、日本・ブラジル交流協会、日伯協会、アフリカ奴隷歴史博物館、セラ孤児院、日系老人ホーム（ブラジル）に於いて日系ブラジル人に関する調査及び資料収集を行い、十一月二六日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、十二月一日大阪発、台湾中央研究院に於いて学術講演及び資料収集を行い、十二月十二日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月八日大阪発、文家屯遺跡（中華人民共和国）に於いて遺跡の踏査、北京大学に於いて集落遺跡に関する調査研究を行い、十二月十四日帰国。

。古勝隆一助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月十八日大阪発、北京国家図書館に於いて漢籍に関する調査及び資料蒐集を行い、十二月二五日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、十二月

十七日大阪発、台湾中央研究院に於いて外字問題を解決するためのワークショップに出席し、十二月二三日帰国。

外国人研究員

。権 泰億 ソウル大学校人文大学教授
朝鮮に対する日本の植民地支配に関する研究

（文化連関研究客員部門）
受入教官 水野教授
期間 二〇〇〇年十二月十一日、三月十日

。Ian James McMullen オックスフォード大学講師

徳川期日本における積奠儀礼の研究
（文化連関研究客員部門）
受入教官 横山教授
期間 三月十一日～六月十日

。John Breen ロンドン大学東洋アフリカ研究院上級講師
幕末期における徳川権力の崩壊過程
…儀礼論の観点から
（文化連関研究客員部門）
受入教官 高木助教授
期間 七月三日～十二月二日

。楊 天石 中国社会科学院近代史研究所研究员

日中近代學術交流史

(文化生成研究客員部門)

受入教官 井波教授

期間 七月十五日～

二〇〇二年一月十四日

招聘外国人学者

。金 琪曼 釜山大学校人文大学史学科副教授

高麗王朝と鎌倉幕府との交流に関する研究

研究

受入教官 金教授

期間 一月一日～三月一日

。胡 坦 中国蔵学研究中心教授

チベット系諸語の声調研究

受入教官 池田助教授

期間 一月三十一日～二月十四日

。Alan Kam-Leung Chan 国立シンガポール大学人文社会学部助教授

日本における道家思想研究

受入教官 麥谷教授

期間 三月一日～五月三十一日

。王 開府 国立台湾師範大学国文系教

授

四阿含とパーリ五部に関する主体性の思想の研究

受入教官 船山助教授

期間 三月一日～八月三十一日

。黄 留珠 西北大学歴史系教授

秦漢制度史研究

受入教官 富谷教授

期間 三月二十日～五月十九日

。Elizabeth Jane Markham アーカンソー大学教授

初期の雅楽史の研究

——催馬楽を中心に——

受入教官 横山教授

期間 六月十日～七月三十一日

。Rendhardt Friedrich Worpert アーカンソー大学教授

初期の雅楽史の研究——唐楽を中心に——

受入教官 横山教授

期間 六月十日～七月三十一日

。宮 長為 中国社会科学院歴史研究所副研究员

殷周時代の研究

受入教官 岡村助教授

期間 六月十五日～七月八日

。蔡 榮 (女十亭) 国立中正大学中国文学系副教授

唐五代時期禪宗「圓相」研究

受入教官 高田教授

期間 七月二六日～八月二六日

。Anders Karlsson ロンドン大学アジアアフリカ学部講師

後期朝鮮王朝の制度史

受入教官 富谷教授

期間 八月十日～九月二一日

。吳 文星 台湾師範大学歴史系教授兼系主任

「京都帝国大学と台湾との研究関係」についての調査研究

受入教官 山本教授

期間 九月一日～十一月三十日

。楊 雨青 中国人民大学歴史系副教授

中国近代教育史に関する調査研究

受入教官 井波教授

期間 九月十六日～九月三十日

。牟 発松 武漢大学人文学院歴史系教授

魏晉南北朝制度史研究

受入教官 富谷教授

期間 一二月一日～

。王 開府 国立台湾師範大学国文系教

授

期間 六月十五日～七月八日

。蔡 榮 (女十亭) 国立中正大学中国文学系副教授

唐五代時期禪宗「圓相」研究

受入教官 高田教授

期間 七月二六日～八月二六日

。Anders Karlsson ロンドン大学アジアアフリカ学部講師

後期朝鮮王朝の制度史

受入教官 富谷教授

期間 八月十日～九月二一日

。吳 文星 台湾師範大学歴史系教授兼系主任

「京都帝国大学と台湾との研究関係」についての調査研究

受入教官 山本教授

期間 九月一日～十一月三十日

二〇〇二年五月三十日

外国人共同研究者

。Christopher Allen Ames ミシガン

大学人類学科博士課程

沖縄についての文献調査

期間 七月三日～八月二四日

受入教官 田中助教

外国人研究者

。Gabriel Johnson

在日日系ペルー人に関する人類学的研究

期間 四月一日～

受入教官 竹沢助教

二〇〇二年三月三十一日

。夏 晶

中江兆民の「小国主義」―小国に徹した独立策へのアプローチ

受入教官 山室教授

期間 四月一日～九月三十日

。金 志 (王十玄)

『黄庭内景経』を中心とする上清派遣
教研究

受入教官 麥谷教授

期間 十月一日～

二〇〇二年三月三十一日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇一年度漢籍担当職員講習会(漢籍電算処理)

第一日(十月一日)

図書館と情報システム(講義)

大型計算機センター教授

金澤正憲

漢字と情報システム(講義)

ウィツテルン、クリスティアン

第二日(十月二日)

WWWによる情報サービス(講義)

大型計算機センター助教

沢田篤史

Windows 上の簡単な Web ペー

ジ作成(講義・実習)

大型計算機センター助手

岩下武史

Web ページ作成(実習)

第三日(十月三日)

最近のデータベースの動向(講義)

大型計算機センター助手

川原 稔

EXCEL によるデータベース(講義・実習)

大型計算機センター助教

小山田耕二

データベース検索(実習)

第四日(十月四日)

TCP/IP とインターネット(講義)

大型計算機センター助手

江原康生

東洋学文献類目とCHINA3(講義・実習)

守岡知彦

村田康彦

テキストデータ処理(実習)

第五日(十月五日)

ネットワークのセキュリティ(講義)

大型計算機センター助教

高倉弘喜

漢字目録データベースとNACSI

S データベース(講義)

国立情報学研究所教授

宮澤 彰

。二〇〇一年度漢籍担当職員講習会(初

期

二〇〇一年度漢籍担当職員講習会(初

期

級)

第一日(十一月五日)

経部(講演)

東京大学東洋文化研究所助教授

橋本秀美

目録法(講義)

梶浦 晋

実習(一)

第二日(十一月六日)

史部(講演)

古松崇志

実習(二)

第三日(十一月七日)

集部(講義)

立命館大学文学部助教授

上野隆三

実習(三)

第四日(十一月八日)

子部(講義)

宇佐美文理

実習(四)

第五日(十一月九日)

新学部(講義)

神戸大学文学部教授

森 紀子

実習(五)

お客さま

十一月一日・二日 中国社会科学院近代

史研究所研究員 姜 涛、聞 黎明

(森、岩井、村上、狭間、江田、森

(紀)が応接した)

十一月二日 中央研究院歴史語言研究

所長 黄、寛 重(小南、森、菱谷、

高田、金が応接した)

北白川の収蔵庫

桑山 正進

人文研の「たからもの」という項を所報人文にもうけるにつき、研究所になにか「おたから」がないものか、あったらそれについてなにか書いてほしいと聞いて、人文研のいわゆる宝ものは有形無形いくらでもありそうなのに、わたしごときへの御下問といえ、なにか古代ものでも、写真か図で示しつつ、解説様のものをつければ事足りるのだろうとおもって気軽にひきうけたら、一〇枚か一五枚という大層な「おたから」解説だとわかって、いささか困惑であるが、研究所の人間ならだれでもが、世界広しといえどもわれわれしかもっていないものを享受し、はたまた安住していることぐらいだれでもしているのだから、あまりみんながしらないもので、しらないから、こんなもの、ということ、なにかの折にうつちやられてはこまる、そんなものを書くことにした。

北白川館東側の収蔵庫はいまはきれいになっているが、昔占領軍の車庫としてつくられた木造平屋であっ

た。軍が去ったあと研究所の公用車の車庫になっていた。半分が中国やイラン、アフガニスタン、パキスタンで採集してきた土器などの遺物や、壹岐や唐津の弥生土器がわんさどあり、一部整理室にもあって、夏はすばらしく暑いとこだった、その後センターができてからは、一部を仕切つてゼロックス室なるものを設け、閲覧者のコピー注文をこなしていた。七〇年代のはじめであった。助教授でもどつた八〇年になると、書庫からあふれた書物の収納が問題になっていた。収蔵庫を二階建に建て替える話が本決まりになり、結局二階建ては平屋積層書架に縮小されたが、新建築だから、事前の発掘調査なるものをやらされ、考古学史で名高い北白川式土器を出す縄文遺跡に近いので、あるいは出てくるかもというわけで、埋文センターからも期待の声があつたりした。ところが、出てきたのは何やら時代不明の遺構めいたものだけだったが、その場所を避けて建つべしと献策したから少し南寄せの設計となり、歴史の部屋には迷惑、考古には叡山の眺望を依然吾がものにできる按配となった。

さて、新収蔵庫にはセンターの書物のあふれた分を収蔵することのほかに、前の建物にいられたあつた考古遺物を当然再び容れたが、当初はどこにどれだけのもの

のをどう、というように、本と遺物とがわりに整然とテリトリを保って配置された。大規模な海外現地発掘などしにくくなった時勢もあり、次第に年がたつても、考古遺物はふえない。だが書物は際限なく確実にふえつづける。久しぶりに收藏庫へ入ると本を置いた棚がいつの間にか増殖して考古テリトリを侵蝕していたりしている。増えつづける本の収納についてどうするかといった所内談義になると、必ず出てくるのが、「あそここに積んである土器は使っていないようだから、いらぬならどここへ押し込んだらどうか」などという、物騒な意見もでる。ドロのついた汚い考古遺物は、書物とは性格が異なっているが、立派な歴史の資料である。直接人間が作ったものだから、まぎれもない直接資料であり、本などの記録のように書いてあることを疑ってかかる心配すらない、素直な資料である。どうも書物は重要でも、考古遺物はどうでもよいといった意識が、書物に依存する方々にはおありのようだ。書物はきれいで高尚。土器なんてどうでもいいやないかでは困る。いま北白川の建物自体が修繕され地下室がうまく使えるようになったので、この手の話は最近こそ聞かないが、そのうちまた出てくるだろうから、そんなときのために、このような場を借りないと喋るようなところもないので、いい機会だから

書いているのである。

それで、あそこには中国関係の考古遺物ももちろんあるわけだが、圧倒的に多いのは、いまいったような土器の類、アフガニスタンやパキスタンの出土品で、ガンダーラのレリーフとトハリスタンの土器、それにイランからアフガニスタン、パキスタンの広範な地域をカヴァーする遺跡の表面採集遺物、といっても土器・陶器の類がほとんどであるが、先史土器片からイスラム陶器片まであり、延べ人数でいえば、何十人という人がこういった地域を隈無く歩き回って集めた遺物である。今後、どうであろうか、そんな大規模な調査がどこの国でもできるといふ時代がやってくるとも直ぐにはおもえない。イランだっていまや国内どこへでも勝手に歩き回れる世の中ではなく、アフガニスタンもやつといま小康状態になっただけで、何時何時ひっくりかえるかわからない。いまの状況が将来確実に存続し、七〇年代以前のアフガニスタンが再来するなど私にはまだとても信じられない。たとえこの国土に再び立てたとしても、考古調査を以前のようにできるのは、それこそ地雷全部がなくなるまではできない相談である。そうなるとわれわれが持っている遺物は土器のかげらだからといって見捨てるなんてことは、とてもできない。

一九五九年から一九六五年までの六年間、もう四〇年も前の現地調査だが、俗にイアパといわれた水野清一の学術調査隊は、パキスタンでは一九五九年、アフガニスタンでは一九六三年から発掘をおこなった。パキスタンの発掘はガンダーラの中心、ワルシヤブラの北でおこなわれた。フシエが昔ヴェッサンタラジャータカにまつわる古寺故宮に比定した遺跡があるところで、チャナカデリーという低平な遺跡は、宋雲行記に出てくる寺だろうとみて発掘したもの、壯大な王宮のような遺構が出て、発掘は正に土木工事の様相を呈し、かけた時間に比して成果はすくない。もうひとつはメハサンダ（水牛のメスとオス）と呼ぶ寺跡が山の中腹にあつて、一九六一年から一九六四年まで発掘、そしてもうひとつ、ガンダーラの平野の北の障壁の南麓にあるタレーリという寺跡が一九六四年、一九六七年の二回発掘された。いずれもガンダーラの佛教寺院で、少しずつ形式を異にし、メハサンダではストウツコの彫刻、タレーリでは片岩製の彫刻が圧倒的に多く使われた寺であつた。北のスイートのイタリアの発掘とともにガンダーラの寺跡の科学的な発掘としては英領インド時代以来はじめてのもので、ガンダーラの佛教を専門に研究するものがその寺院がいかにつくられていたか、その外形がいかにどのようなものであつたか、そ

の莊嚴はといった諸點に、直接觸れて研究することができたことは、おおきな意味があつた。そんな水野調査隊の最終ラウンド一九六七年に、それまでの出土品を協定に従つてパキスタン考古局と調査隊とで分割することになった。タレーリの石の彫刻はAからEまでに分類され、AからDまでがみんなパキスタン側、Eだけが京大側の所有となつた。Eだけとはなぜなの？　と思うなかれ。よく考えてみれば、正式に発掘した遺物を両国で分割して所有するなんてことは、このあたりでは戦前、フランスが掘つたベグラームの遺物をギメとアフガニスタンが分割したことくらいしか知らないことであり、今日、好事家の垂涎的であるガンダーラ美術の国外流出に神経を尖らせているパキスタンを考え、まことに不思議である。だからE級品とはいえ、贗物の横行するなかでそれは宝物なのであり、考古学徒にとっては土器とともに計り知れない大事なものである。

純粹な書齋派にとつて遺物は価値がないものかもしれない。汚いという先入見もあるだろうが、泥の中から出てきて泥だらけということは、衣帯の知れない綺麗なものより、磨きがいがある。文書は後世の偽作が心配だが、発掘品に偽物はない。収蔵庫の「異物」を大事にしてください。

欲望のあいまいな対象

箭内 匡

田中雅一さんの呼びかけで、文化（社会）人類学、文学、思想、心理学など様々な分野の人が集まり、フェティシズムについての共同研究を行っている。参加者それぞれの思惑はあるだろうが、文化人類学的な観点からいえば、近年の主体やアイデンティティの構成という議論の中で見落とされがちなもの（オブジェクト）の意義を、フェティシズムというテーマの検討を通じて再評価しよう、というのが主要な問題関心の一つである。

スタートから二年近くが経過し、地域的にもテーマ的にも多様な、それぞれ大変興味深い発表がなされたが、正直言ってなかなかフェティシシュの正体はつかめない。フェティシシュはフェイク fake と同語源とされるが、まさに本物か偽物かわからない、曲者である。ルイス・ブニエルは映画『欲望のあいまいな対象』で、濃厚にマゾヒズム的・フェティシズムの世界を彼一流の諧謔を交えつつ描いて見せたが、フェティ

シシュは、この映画の主人公コンチータのように、我々を魅了するかと思えば、我々を裏切り、失望させる。

そうした中でも、個人的印象としては、ある程度の輪郭はつかめてきた感じもする。フェティシシュと呼ばれるものが、呪術的・宗教的・審美的・性的な高い価値を与えられつつも、同時に何らかの意味で着脱可能なものであること、そうであるがゆえに、儀礼や宗教的・マゾヒスト的契約といった装置（個人的忠誠心でもよいが）の下では大きな力を発揮するが、そうした装置の外では自律性を失いやすいこと、などである。現代社会は、あらゆる商品に審美的付加価値が加えられ、我々は「自らの好みに応じて」それを購入するわけだが、そうした「商品のフェティシズム」（マルクスとは違った意味での）の性格も、そうした枠組みの中でよりよく理解できるようになるように思われる。

ただ、他方では、精神分析の対象論や動物行動学・霊長類学における主体と対象との関わりの研究の成果など、さらに根源的な主体と対象の関わりの検討をも踏まえた上で、様々なフェティシズムの現象を捉えてみたい気もする。

いずれにせよ、我々自身は、「フェティシズム研究」という一種のフェティシシュと、三年間の契約（奴隷

契約?)を結んでしまったのである。(主人?)のフエティツシュが、今後どのような力を発揮してくれるか、楽しみである。

「カーブル」と「カブール」

稲葉 穰

共同研究班『訳経僧伝研究』は班長の定年退官とともに二〇〇一年度一杯で終わりを迎えた。桑山教授が行歴僧、訳経僧の伝記を研究する一連の研究班をスタートさせたのは一九八三年のことだから、まる十九年続いたことになる。私が参加するようになったのは確か一九八七年、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』の会読の最後の方だった。その後、『慧超往五天竺国伝』、『悟空行紀』、『法顕伝』、『高僧伝』と会読を続け、訳注や索引を作成してきた。これら中国、インド、中央アジアといった地域を経巡った僧侶達の記録は、このところ国際政治のホットスポットとなっているアフガ

ニスタンあたりの歴史地理を考究するためにも欠くべからざる資料となっている。

ところでアフガニスタンについては前々から気になっていることがある。それは「カブール」という、昨年来数え切れないほどメディアに登場している言葉だ。もちろんこれはアフガニスタンの首都「カーブル」のことなのだが、以前から日本のメディアはこのまちを「カブール」と呼んでいる。外国語の発音を日本語で正確に写すのは困難な場合が多く、この呼称の使用自体に目くじらをたてるつもりはそれほどないのだが、それにしてもなぜ「カブール」と呼ぶのか、その由来来歴は気になる。これまではほんやりとフランス語の「Caboul」あたりがもとなのかなと思っていたのだが、昨年末に国立公文書館のウェブ・ページに開設された「アジア歴史資料センター」で昔の外交文書を検索できることを知り、試しに調べてみた。そこで見つかった最も古い記録は明治一八年(一八八五年)の「亜富汗論近況ノ件其二」と題する文書だった。これは当時のアフガニスタンにおける英露の紛争に関する在露特命全権公使花房義質からの報告で、そこに「カブール」という言葉が見える。ところでこの報告、ロシアから送られてきたわけだが、ロシア語では「カーブル」は Кабул と書かれる。力点はウの上にあるよう

だからこれは「カブール」に近い発音なのだろう。ということは日本における「カブール」という表記のものはロシア語の発音だったのではないかと、勝手に納得しかけたのだが、念のためもう少し遡って江戸末期、万延元年（一八六〇年）に翻訳された地理書『地球説略』をパラパラめくってみた。すると「加布利」と書いて「カブール」とルビを振ってある。またに徐繼畲の『瀛環志略』に井上春洋らが訓点したもの（文久元年／一八六一年）では「喀布爾」に「カビュール」とルビを振ってあって、なんだかよくわからなくなってしまった。この調べものはもう少し先がありそうである。

ちなみに研究班で会読してきた僧伝には、不思議なことに「カーブル」にあたりそうな地名は出てこない。かつて研究班で班長からその点を示唆されたことが、この地域の歴史地理を考える上で大きな鍵となった。私が研究班から受けた数多くの恩恵の一つである。

進化論と「私」

北 垣 徹

数年前にコレージュ・ド・フランスで開催された、進化論や古生物学・地質学の歴史にかんする連続講義でのこと。回を重ねて出席するなかで、私はある日本人の男性と知り合いになる。何回目かの講義の後、最初どちらからともなく話しかけ、簡単な自己紹介から始まり、程なくカフェに場所を移して話を続けた。聞けば彼は東京のメーカーで働いていたが、十年ほど勤務した後その仕事を辞め、パリにやって来て視聴覚の障害者教育にかんする研究をはじめたのだという。そのころ私もたまたま、第三共和政期における精神遅滞児の教育政策についての文書などを読んでいたところだったから、その方面で話が「山咲く。ややあつて私は」ところで、どうして進化論の歴史に興味をおもちなんですか」と切り出した。そのとき一瞬、彼の眼がキラリと輝くの気づいたとき、私は「ああ、しまった」と後悔の念を抱く。人の話を聞くことはけつしてキライではないのだが、そのときは後に別の待ち合わせ

せが控えていたのだ。案の定、彼の方は「いや、進化論の歴史はさておき、私自身、〈私の〉進化論というのを考えていましてね」。そして彼が自分で構想したという、無機物から始まり有機物へと連なっていく壮大なヴィジョンは、時計にチラチラと目をやる私の前で、優に一時間は続いたのだった……。

進化論とは気の遠くなるような時間のスパンのなかで、生物の多様な広がりと変化を説明する理論である。大きなスケールの時空間のなかで生起する因果律を含むわけだから、それはまさに一つの世界観を構成する。進化論の歴史をみれば、それがいかに既存の宗教に抵触してきたかがよく分かるだろう。そしてそれは過去の話でなく、現在においてもなお紛糾した議論をよぶ主題なのだ。こうしたトピックが「私」という一人称のもとで語られることは、一見やや奇妙にみえる。しかし私がパリで出会った男性が、特に変人だったわけではない。フランスから帰国して共同研究「進化論と社会」に加わったとき、私はときとして彼のことを思い出した。というのも、彼を彷彿とさせるような語りに、研究会のなかで何度となく出くわしたからである。もちろん、それぞれ専門を定めた研究者たちは慎重だから、軽々しく「私の進化論」などとは口にしない。それでも、経済学や社会学、歴史といった専門を越え、

ヨーロッパやアジア、アメリカという対象地域も越え、自然科学と人文・社会科学という枠すら越えて、饒舌な語りが流れていく。そして周りの者もあるときはそれに魅せられ、あるときにはやや辟易しつつも、後の議論はきまって白熱するのだった。

あるいはむしろ、一種の世界観であり壮大な視野をもたらずからこそ、かえってそこに世界と相對する一個の「私」が出現するのかもしれない。そのようなわば進化論をめぐる「私」の現象学を考えても、おもしろいかもしれない。しかしかくいう私も、数年前まではほとんど興味を寄せることのなかった進化論なのに、いつの間にか関連資料は書棚のなかを増殖していき、ときには長い間この対象に取り組んできた専門家のような口振りをすることさえある。「私の進化論」を口走るときだって、近いのかもしれない。それはともかく、この共同研究も本年度で終わり、近い内に報告書が出る。おそらく読者はそこに、複数の「私」の影を見いだすことだろう。

「言語接触」研究の難しさ

中西 裕 樹

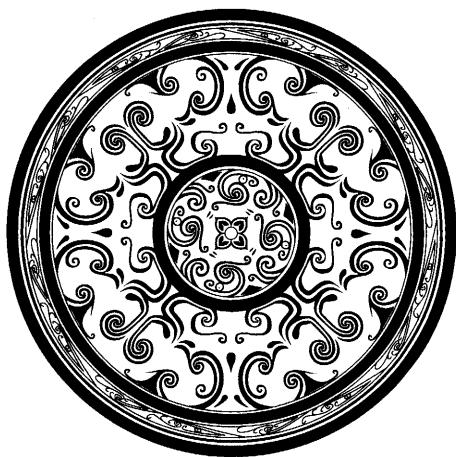
一九九八年度から二〇〇一年度までの四年間にわたって組織された「十六・十七世紀アジアにおける言語接触」班では、一九九九年度から *Doctrina Christiana* の一九九三年タガログ語版の会説に取り組んできた。この文献の背景には大航海時代以降のアジアにおける大規模なキリスト教の布教がある。ヨーロッパの言語と東・東南アジアの言語が初めて体験した大がかりな接触、その最初期のものが本研究班のテキストとして選ばれたのである。このタガログ語版解読の手がかりとして、ほかにスペイン語版・ポルトガル語版や、ほぼ同時代に翻訳された日本語版・ペルシャ語版・中国語（閩南方言）版など多種類に及ぶテキストが用意された。班員の国籍も日本の他フィリピン・ルーマニア・ドイツと多様な上に、それぞれの専門も中国語学・キリシタン語学・キリシタン文学・東西交渉史学と多岐に渡っている。研究班では、各々が専攻する分野をふまえ、得意とする角度からタガログ語版

の解説に取り組んできた。

一 通り日本語訳が終わったところで、二〇〇一年の秋からは、報告書作成へ向けて訳注の見直しをすすめ、同時に本国フィリピンに成果を還元するためにテキストの英訳を並行して行っている。そこで改めて、原文を解読する（できるだけ原文に近い日本語におきかえる）作業と日本語に翻訳する（できるだけわかりやすい日本語に直す）作業が全く次元を異にしていることに思い至った。解読の段階では、元々のタガログ語の構造に忠実に訳すことを原則としていた。そうすることによりタガログ語版とその元になったスペイン語版との相違や言語接触の様相を解明することができるところである。この原則は、発音・語彙・文法のすべての面に及ぶ。例えば発音を反映させた外来語の表記について。タガログ語版では、固有名詞やタガログ語に翻訳できなかった概念は、スペイン語でそのまま表記されているが、これらについては我々の日本語訳でも原則カタカナで表記することにした。タガログ語の音韻を考慮し、例えば、地獄という意味の *infierno* は「インベルノ」と表している。語彙・文法に関しては、タガログ語と日本語の構造の違いにより、日本語に置き換えるのに苦心した。例えば、「クリスティアノたちの信仰の基礎、十四項目」の一節には、「われわれの

主なるセス・キリストが、まだ生んでいないときも生んだあとさえも、本当のビルセンである、本当のビルセン、サンタ・マリアに生んでもらったことを信じなさい」という訳がある。このような訳文を、原文の構造を活かしながら、日本語として通用する表現にどう変えていくか、頭を悩ませるところである。

スペイン語からタガログ語へ、当時の訳者たちが頭を悩ませていたであろう言語接触の原点に、僅かながら私たちも立ち会えたような気持ちでいる。



「孝」の伝統と現代

麥谷邦夫

二〇〇二年一月一〇日から一二日まで、シンガポール国立大学で開かれた“Conceptions of Filial Piety in Chinese Thought and History”というテーマの国際会議に出席してきた。

“Filial Piety”すなわち「孝」は、長い中国社会の伝統の中で、家族制度ひいては皇帝を頂点とする国家制度を維持するうえでの最も重要な徳目のひとつとして、人々の行動を厳しく規制してきた。その影響は、同じ儒教文化圏に属する日本、朝鮮、ベトナムなどに広く及んでいる。日本でもごく最近まで、「親孝行」や「親不孝」といった言葉が日常的に使われてきたことは記憶に新しいが、今やこれらの言葉は死語に類するといっても決して過言ではなからう。しかし、華人社会においてはそうではない。華字紙を開けば、大抵仰々しい死亡広告を目にするようになるが、そこには「孝子某々」「孝女某々」などという文字がずらりと列ねられている。子として「孝」でないことは、人ではないのと同様の社会なのである。そのことの意味を探る

のがこの会議の目的であった。

ところで、「孝」を規定した儒教経典『孝経』の冒頭には、「身体髮膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり」とある。この経文を拠り処として、僧侶に剃髪を求める仏教は「不孝」を教える反社会的宗教であるとの激しい非難が加えられたことは、良く知られた中国史の一齣である。いくらでも生えてくる頭髮でさえ切ってはならず、自分の身体を傷つけることなく土に返すことが「孝」の第一歩だとすれば、刺青やピアスなどはもつてのほかと考えるのは、どうやら凡人の浅はかな考えのようであった。会議に出席していた華人女性のほとんどは、きれいな穿耳環（ピアス）をつけていた。耳朶に穴を穿つことは、『孝経』の教えに従えば「不孝」ではないのか、一瞬彼女たちに聞いただいたいという思いに駆られたが、結局、その問いは呑みこんでしまった。「女子と小人とは養い難し」という孔丘先生の金言もあるし、わが目を樂しませてくれる女性たちに、何も好きこのんでイチヤモンをつけることもなからうという、男の身勝手からでもあった。

キンゼイ研究所を訪ねて

田 中 雅 一

「明日から久しぶりにベッドでぐっすり眠れる」、初めての合衆国本土への渡航を前にして、とつぜんこんな思いがわいてきた。昨年八月末のことだ。しかし、この旅は、九月一日の同時テロという事件で、けっして安穩なものではなかった。首都で足止めをくらい、予定より六日も遅れて帰国したからだ。今回の調査でわたしが意図していたのは、アメリカの公私を代表する文化といえる軍事と性について関連施設を訪ねることであった。ここでは、後者の例としてインディアナ大学構内にあるキンゼイ研究所を紹介したい。

キンゼイ研究所の正式名は「性・性差・再生産のためのキンゼイ研究所」(The Kinsey Institute for Research in Sex, Gender and Reproduction)で、いわゆる『キンゼイ・リポート』(男性版が一九四八年、女性版が一九五三年に出版された)で有名なアルフレッド・C・キンゼイ博士(一八九四—一九五六)によって一九四七年に設立された。かれは、一九三八年にインディアナ大学からの要請で人間の性行動と結婚に

ついての講義をはじめた。そのために収集した資料を保存を目的として研究所が設立されたのである。

研究所は講義棟の三階と四階を占める。名前の割に地味だというのが第一印象だ。スタッフのほとんどが動物学や医学関係者で、研究成果も多くが性科学の領域におさまる。しかし、本研究所はそのコレクションによって、セクシュアリティに関心のある内外の人文・社会科学系の研究者から注目されている。たとえば商業フィルムが六千、ビデオ七千、写真五万枚、そのおおくがポルノグラフィとみなされている代物である。欧米のものが中心だが、日本や中国のものもある。

閲覧室は人文研のものより小さいが、ハスラーなどのポルノ雑誌やラス・メイヤーズ映画の主題曲が収められているCDが新着棚に置かれているところが他のところとは大違いである。テーブルに座っていると図書職員が恭しく明治、大正時代に撮られたポルノ写真を持ってくる。こちらも手袋をはめて神妙にこれを閲覧する。そんなふうにして三日間をここで過ごした。

人文研とはその由来も性格も異なるが、セクシュアリティが研究領域として重要になりつつある現在、キンゼイ研究所の活動はけっして無視できない、そう確信してインディアナ大学を後にした。

(注) 詳しくは研究所のホームページ URL <http://www.indiana.edu/~kinsey/index.html> を参照してください。

国連反人種主義世界会議に出席して

竹 沢 泰 子

二十一世紀の幕開けをあまりに暗く悲哀なものとした「9・11」が生じたのは、南アフリカのダーバンで開催された国連反人種主義世界会議が、人種主義・人種差別撤廃を宣言して閉幕した僅か三日後のことであった。テロ行為の野蛮性は問題外として、その根本的問題の一つであるパレスチナをめぐるイスラエル・アメリカとイスラム圏アラブ諸国との対立は、人種差別の撲滅を目指して連帯するはずの会議で相互の憎悪が一層表面化したと言わしめるほど、深く深刻なものであった。シオニズムを人種主義の一形態として認めるか否か、それが奴隷制に対する賠償問題と並び、今回の世界会議の最大の争点であった。大混乱の末の最終

宣言では、イスラエルという名指しを削除し、パレスチナをめぐる双方の迫害を列挙して人種主義を戒める内容となった。しかし真の合意からはほど遠く、双方に不満を残す結果となった。

私自身は国際人類学民族学連合のパネリストとして出席したのだが、私の予想以上に、過去の帝国主義・植民地主義から今日のグローバルゼーションに至るまで、アメリカや他の西洋諸国に対する第三世界の反発は熾烈なものであった。あるパネリストの一人が、「安い材料、安い労働力は、ここアフリカから彼らは得たのだ」と叫び、会場が拍手喝采で応えたことが印象的であった。

アパルトヘイト廃止を勝ち取った南アフリカが開催地となったのは象徴的である。しかし南アがこのような世界会議の主催国になるには早熟すぎたという現地の声もあった。近代都市ダーバンでさえホテル数が圧倒的に不足し、会場から四〇―五〇キロ離れたB & Bに回された客も多かったし、エクアドルの知人の男性グループは白昼ホテル前でナイフでシャツを切られ、財布を奪われたそうだった。南アフリカの現在の失業率は四十七%だという。黒人居住区と呼ばれる地域に案内してくれたガイドは、アパルトヘイトの後遺症で今も多くの黒人が苦しみ、日々糧を求めてギリギリの生活

を強いられている人々は、犯罪に走るか精神病に陥るかどちらかだという。南アは他のアフリカ諸国に比べれば比較的裕福な国とされる。しかしそれは平均値であって、ブラジルと並んで世界でもっとも貧富の格差の激しい国でもあるのだ。

アパルトヘイト廃止から十年余。しかし現実の変化には苛立たいほど時間はゆっくりと流れている。居住区にも職業にもいまだに明らかな人種ラインが存在する。帰路空港で買ったネルソン・マンデラの長編の自伝を読んだ。多くの若い命が政府の警告なしの発砲に次々と命を落としながら、それでも怯むことなく運動を続け転覆を成功させたすさまじい歴史だ。しかしその時人種差別への訣別を勝ち取った世界の一致した声、手の取り合いを、今私たちは過去のものとしてしか思い浮かべることができない。第三世界の出席者が圧倒的多数を占めたこの世界会議で、西洋諸国の一般人とのあまりの歴史認識の差、問題意識の差にどのようにに和解への糸口を見いだしていけばよいのか、どこに希望があるのか、暗澹たる気分であった。テレビであの光景を目にしたのは、それから間もなくのことであつた。



インドのダリット（被差別カースト）に対する差別を「レーシズム」と認定するように訴える行進

聖者の数

船 山 徹

研究室で仏教書を読む日常のなかで、この一年は、悟りや修行にかんする記述を多く読んだように思う。これまで私は仏教書を看板にかかげながらも、そういう部分を直接の研究対象とするのを避けてきた。悟りのことはその経験のない者にはピンとこないから、ブツダの目に世界はどう映るか、修行をつづけて聖の境地に入ると、凡夫とは何が違ってくるか、などの論題は、それがどう書いてあったところで、自分には真偽の判定不能な言辞に思え、敬して遠ざけてきたのだ。しかし昨年は研究の進行上、そうも言っていられなくなった。そこでわけのわからぬまま、せいぜい想像を逞しくしてテキストを読んでみたのだが、そこから、ひとつの素朴な、あまりに素朴な疑問をおさえられなくなった。それは、悟りについて論ずる書物を残した昔のインドや中国の人々は、わが実体験からして悟りとはこうだと述べたのか、体験はなくとも何らかの確信があったのか、それとも懂れの産物だったのか——つまり、テキスト作者の宗教体験への好奇心と、それ

を読んで理解しようとする私のスタンスの問題。こんなことを書くと、何をいまさら寝ぼけたことを！と嘲笑されるだけかもしれない。あるいは、本当に悟った人は文章など書かぬもの、と諭されるかもしれない。しかし私は、文献から何がどこまで言えるか、この一点にこだわりたいのだ。

こんなことを気にしはじめたきっかけは、空の哲学者として有名な龍樹（ナーガールジュナ）は、大乘菩薩の聖なる十の階位のうちの初位、つまり一番下であり、無著（アサンガ）は第三位まで到達したという伝承が、インドとチベットにあるのを知り、かたや中国には、無著の弟で唯識思想を大成した世親（ヴァスバンドウ）は、初位にも達しなかったという伝承があるのを知ったことだった。それまで抱いていた何となくのイメージから、直感的に、これは低すぎやしないかと思った。これでは第四位より上は該当者ゼロになるではないか。それこそインド的な思惟だという解釈も成り立とう。ただ実践目標という点からみた時、学派の祖師にしてこうなら、継承者や一般の修行者が辿りつける境地はどのあたりなのだろう。インド大乘仏教で聖者ないし悟った人と思われた人間の数は、実は案外に少ないのだろうか。一方、中国では、儒の立場ではインドの大乘と同様に、聖人は稀少であり、特に中

世には人は学んで聖人になれるとは思われていなかったようだが、仏教の方では聖者と目された人はたくさんいたと記録される（詐欺師もたくさんいたが）。そして仏教の聖者は学習と修行によって達成可能と信ぜられた。こうしたことはもとより、聖とは何かの定義や「神仙学んで得べし」の論と直結しようが、仏教理論を云々したり、経典や祖師の著作に注釈を施した仏家の多くは、存外、聖者でなく凡俗の人なのであって、今の我々とそれほど隔らないところで著作を試みたのかもしれないと邪推したりしている。

日本人らしからぬと言われて

古 勝 隆 一

二〇〇〇年四月から十ヶ月間、台湾の中央研究院、歴史語言研究所に訪問学者として籍を置く機会を得た。伝統あるこの研究所は、外国人学者に対してこの上もなく寛大であり、私の如き駆け出しにまで研究室を貸与してくれるのである。若手の場合、一部屋を同性の

二名で利用するのが原則らしいが、国籍の異なる人と同室になることも多い。私の室友は、アメリカの大学院で学ぶマカオ出身のLさんであった。

いま思い返しても愉快な人であった。台北についても研究所についても、ほとんど知識を持ち合わせていなかった私は、知りたいことのすべてを彼に問うた。彼自身、台湾に来てまだ数ヶ月であったにもかかわらず、細大漏らさず何事もよく把握し、適切かつ面白く教えてくれた。彼が話す広東なまりの北京語は不思議とよく理解できた。

ある日、街に出るために彼とともにタクシーに乗ると、運転手が「君たち香港人だろう」と声をかけてきた。Lさんは笑いながら、即座に「そうそう」と答える。彼と私が同郷であったとは知らなかった。楽しいひとときを感じられた。

しばらくして彼はアメリカに戻っていった。それまで彼に頼りきりであった私は、少し自立せねばと考え、積極的に市内に出ることにした。生来、出不精ではあるが、好きなどころに行くくらいは私にもできる。書店等を中心に歩き回った。

台湾には気さくな人が多く、街で話をする機会も乏しくはない。彼らは私にこう言うのである、「君は香港人でしょ」。初めのうちこそ、Lさんとタクシーに

乗った時のことを懐かしみしたが、こう皆が口を揃えるからには必ず何か理由があるのだろう。まず十回のうち八、九回は間違われた。残りは、お見事、日本人と言いつた。それは大方、日本人相手に商売する、日本語の達者な人たちであつたが。

間違われるたびに訂正した。納得してくれる人もあつたが、多くは「あまり日本人には見えない。やつぱり香港人に似てるね」と主張して不審げなまなざしを返す。終いにはうち消す氣も失せた。なぜそう見えるのか。研究所の友人たちに聞いたが、「香港人には見えない」と言うのみで要領を得ぬ。

ある時、氣のおけない先輩、Z兄に意見を徹した。口がよいとはいえない彼は「それはひどい。『天不怕、地不怕、就怕老広説普通話』ということわざ知っているか」と苦笑。天もおそれず、地もおそれず、げにおそろしいのは広東人の話す標準中国語、と。

ただ、誤解無きように言うが、もちろん、香港・マカオ人を含め、多くの広東人は私などよりはるかに流暢な標準中国語を話す。いま思えば、テレビを見て修得したというしさんのそれも、味わい深いものであつた。

二股大根論序説

菊 地 暁

ここ数年、何の因果かアエノコトに没頭している。

石川県の奥能登に伝えられるアエノコトは、農家の主人が田んぼから「田の神様」を迎え入れ、お風呂やご馳走で労をねぎらい、収穫を感謝し豊作を祈願する儀礼である。目には見えない田の神様をあたかも居ますが如くに振る舞う古めかしい演劇的所作が特徴とされている。また、さまざまなアイテムが田の神様を可視化するために用いられ、その一つに「二股大根」がある。私は精神分析科医ではないので、世の全てが男根と女陰に見えるわけではないのだが、二股大根の白い、丸みを帯びてむっちりした形状が女身になぞえられることは一応了解できる。実際、二股大根が民俗行事において豊饒祈願に用いられるのは、女体との類似に基づく模倣呪術となるからだ。

二股大根の昔話を聞かされたことがある。ある日、田の神様が餅をのどにつかえてしまったので、若い嫁に大根を所望した。おろし大根がつかえた餅をとるのに良いからだ。だが、その姑が厳しく一本たりとも分

けることはならないという。そこで嫁は、大根を割いて二股にして分け与えたのだそう。二股なら「傷物」なので分け与えてもかまわない、ということだろう。

この話は一体何を意味するのか。単純に考えると、田の神様に二股大根を供える儀礼を説明する起源説話と解することが出来る。だが、どうもそれだけではとどまらない。というのも、話の主人公が儀礼の担い手たる男性家長ではなく、わざわざ若い嫁とされているからだ。若い嫁が来訪する男(田の神様)の誘いにそのかさね、姑の禁止をかくぐり、その誘いに応じてしまう。繰り返すが私は精神分析科医ではないので、全てを性に還元するつもりはない。だが、この話はどうも性的ニュアンスがつきまとう。そう考えると、二股大根は、若い嫁の股それ自体を暗示しているのではなからうか。なんとも即物的なイメージがわいてくる。とはいっても、実は、それ以上の意味がこの話に含まれているとは思っていない。というのも、アエノコトから「家永統の願い」というイデオロギー的含意を仮構してきた民俗学者たちを別にして、当の伝承者に行事存在理由を尋ねるなら、「行事の後のご馳走が楽しみだから」といった極めてプラクティカルな返答が多いからだ。察するに、この話は、行事の後のご

馳走を前にして語られる酒の肴、場を盛り上げるエロティックな笑話という以上の意味はないのではなからうか。

そうはいっても、そうしたエロティックな空想を喚起してしまう二股大根というモノそれ自体の「力」のようなものは、やはり注目に値する。共同研究「フェティシズム研究の射程」に参加して二年、物体(object)と主体(subject)をめぐる曖昧模糊とした関係性について考えられることが多いのだが、私自身、未だ確たる見通しもないまま彷徨っている。

さて、二股大根論「本論」が書かれるのは、いつの日になることか。

書いたもの一覽 二〇〇一年一月〜十二月 (氏名五十音順)

●は単行本)

井 狩 彌 介

●古典インドの法と社会

平成九—十一年度文部省科学研究費補助金・

研究成果報告書 四月

●ヴェーダ・ヴァードウーラ学派文献の総合研究

平成十一—十二年度文部省科学研究費補助金・

研究成果報告書 四月

池 田 巧

フェデリコ・マジニ 宣教師が中国語に与えた影響につい

て(翻訳) 狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』

京都大学学術出版会 二月

●論集・東・東南アジアの少数言語の現地調査(編著)

科学研究費成果報告書 三月

川西走廊のチベット系少数民族言語『論集・東・東南アジア

の少数言語の現地調査』

三月

●解説!香港(共著)

マックで中国語 他三項目 月刊しにか 十二卷五号 五月

風水の活きるハイテク空間 ニッセイ『経営情報』Vol.353

星和ビジネスサポート 九月

石 川 禎 浩

近代東アジア「文明圈」の成立とその共通言語——梁啓超に

おける「人種」を中心に 狭間直樹編『西洋近代文明と中

華世界』 京都大学学術出版会 二月

梁啓超與文明的視点 狭間直樹編『梁啓超・明治日本・西

方』 社会科学文献出版社 三月

農村革命へのシフト——中国共産党の農民運動方針とコミン

テルン 森時彦編『中国近代の都市と農村』 京都大学人文科学研究所 三月

雑誌『上海』『上海週報』記事目録

(科学研究費補助金成果報告書) 三月

楊奎松報告に対する問題提起 現代中国研究 八号 三月

●中国共産党成立史 我怎樣写作《中国共産党成立史》 岩波書店 四月

百年潮二〇〇一年第七期 七月

稲 葉 稜

安史の乱時に入唐したアラブ兵について(講演録)

東洋史苑 第五八号 十月

井 波 陵 一

王国維の国学——記憶よ、語れ。 狭間直樹編『西洋近代文明

と中華世界』 京都大学学術出版会 二月

文学理論の近代化——『紅樓夢』をめぐる 小南二郎『中

国文学における通俗文学の発展及びその影響』

科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 研究成果報告書

(研究課題番号 10410100) 三月

中国目録学——四部分類法について

京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター 四月

目録学 池田知久等編『中国思想文化事典』

東京大学出版会 七月

●『週刊朝日百科・世界の文学』一〇八(紅樓夢、金瓶梅ほか

女たちの世界)(編著)

朝日新聞社 八月

時代を代表する魂『週刊朝日百科・世界の文学』一二〇

(文学はどこへ向かうか)

朝日新聞社 十月

涙の流れるままに——林黛玉以外の人々 小南一郎編『中国

の礼制と礼学』

朋友書店 十月

王国維の歴史研究——アヴァンギャルドの時代に 宇佐美齊

編『アヴァンギャルドの世紀』

京都大学学術出版会 十一月

岩井茂樹

武進原の田土推収と城郷関係 森時彦編『中国近代の都市と

農村』

京都大学人文科学研究所 三月

殺人マニア・永楽帝 月刊しにか 第十二巻八号 八月

書評…岸本美緒著『明清交替と江南社会』

歴史学研究 第七五二号 八月

書評…山本英史編『伝統中国の地域像』

史学 第七一卷一号 十二月

クリスティアン・ウィッテルン

Editing XML 佛教圖書館館誌 二十四 三月

●(翻訳) Tsuneki Nishiwaki: Chinesische und Manjurische

Handschriften und seltene Drucke. Teil 3: Chinesische

Texte vermischten Inhalts aus der Berliner Turfansam-

mlung. Franz Steiner Verlag Stuttgart 九月

漢文電子佛典製作與運用之研究——以『瑜伽師地論』為例

(共著) 中華佛學學報 十四 九月

電子化とは何か? 漢字と情報 三一〇月

Some thoughts on the digitization of Kanji

全国文献・情報センター人文社会科学学術情報

セミナーシリーズ 十一 十一月

Charting of Unknown Territory: Application of Topic

Maps to Chan-Buddhist Chronicles

電子佛典 三 十二月

宇佐美 齊

ランボーの花園(1)——グラジオラス——

小原流 挿花 一月

若き日の佐々木康之さん 佐々木康之教授退職記念論集

立命館大学人文学会 二月

北辻良央の世界——「客人の庭」展に寄せて——

小原流 挿花 二月

中原中也とフランス近代詩 井波律子・井上章一編『文学に
おける近代——転換期の諸相——』

ランボーの花園(2)——国際日本文化研究センター 三月
夜明けの化身と一輪の花——

小原流 挿花 四月
物語を織る喜びと哀しみと

「国文学解釈と鑑賞」別冊 立原道造 至文堂 五月
ランボーの花園(3)——魔法の花々——

小原流 挿花 七月
手紙という小道具 イリブス 五号 十月

ランボーの花園(4)——「花について詩人に語られたこ
と」—— 小原流 挿花 十月

フランス近代詩への情熱——富永太郎と中原中也をむすぶも
の—— 中原中也記念館 秋の企画展リーフレット 十月

●アヴァンギャルドの世紀(編著) 京都大学学術出版会 十一月

宇佐美 文理

「線」と「かたち」——敦煌北朝期の壁画を手がかりとして
人文科学論集 第三十五号 三月

病と「かたち」 科研報告書『美学と病理学——人間経験の
解釈学としての感性論に関する基盤研究』 三月

莊子「万物斉同」の思想 週刊朝日百科世界の文学 一〇二 七月

大浦 康介

清水先生のこと

Flotéal, No. 20 甲南女子大学フランス文学会 二月
イエナ派と近代——初期ロマン派にみる〈組織化〉の黎明

人文学報 第八四号 六月
●ピエール・バイヤール『アクロイドを殺したのはだれか』

(翻訳) 筑摩書房 九月
Mes années a-normales, *Bulletin de la Société des Amis de*

l'Ecole Normale Supérieure, No. 220 九月
Conversation à Kyoto (Philippe Forest との対談), *Neige*

d'ivoire, No. 5 十月
宣言の時代とアヴァンギャルド 宇佐美斉編『アヴァンギャ

ルドの世紀』 京都大学学術出版会 十一月
ピエール・バイヤール「新しいアイデアはどうしたら手に入

れられるか」(翻訳) (同書所収) 十一月

大原 嘉豊

「図像学」の研究 人文 第四八号 三月
九品来迎図研究における顕密体制論の実効性

哲学研究 第五七二号 十月

岡村 秀典 解説『中国文明の歴史1 中国文化の成立』

古墳の出現と神獣鏡 中央公論社 一月

東アジアの古代文化 第一〇七号 五月

「人間」を探究する考古学

熊本日新聞 七月二日

遼東新石器時代の玉器

国立台湾大学理学院地質科学系研究報告 第三三期 九月

倭王権の支配構造 『考古学の学際的研究——濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ——』

昭和堂 十月

殷周時代の動物供犠 小南一郎編『中国の礼制と礼学』

朋友書店 十月

仰韶文化的聚落結構

考古與文物 第六期 十二月

落合弘樹

●明治国家と士族

吉川弘文館 一月

明治初期の外征論と東アジア

山室信一編『近代東アジアの構造連関』

吉川弘文館 一月

維新期の彦根藩と彦根藩士 佐々木克編『幕末維新の彦根藩——彦根城博物館叢書Ⅰ——』

彦根市教育委員会 三月

明治九年一月の国事犯捕縛一件 三上昭美先生古稀記念論文集刊行会編『近代日本の政治と社会』

岩田書院 五月

籠谷直人

商品流通と華僑ネットワーク 森時彦編『中国近代の都市と農村』

京都大学人文科学研究所 三月

●一九三〇年代のアジア国際秩序（共編）

溪水社 四月

戦間期日本とアジア通商網——日本の綿布取引を事例にして

—— 古屋哲夫・山室信一編『近代東アジアの構造連関』

日本は孤立したか

『朝日新聞』三月二十二日

吉川弘文館 一月

加藤和人

●生物のかたちと数理——近藤滋氏との対話——、平成十二年

度教育改善推進費研究報告書／自然学・人間学の教育の体系化・今西錦司生誕百年記念事業、代表松沢哲郎、研究報告別冊（横山俊夫氏と共編）

京都大学霊長類研究所 三月

A new way to communicate science to the public: the creation of the Scientist Library. (三石祥子、中村桂子氏と共著)

Public Understanding of Science 四月

人の心につながる科学を

『科学』第七一卷 四／五号 岩波書店 四月

人間を知る・自然を知る生命科学（一）——DNAからみた人

人と生物の歴史と関係——創造する市民 六七号 四月

人間を知る・自然を知る生命科学（二）——DNAは生命の設計図？——

創造する市民 六八号 七月

ゲノムの時代をどう読むか——生物学・生命科学の素顔を探る——

シリーズ「市民社会と科学技術（一）」（インタビュ）

フロント 十月

クローン技術の背景を探る——発生生物学と応用技術——

シリーズ「市民社会と科学技術（二）」（インタビュ）

フロント 十一月

生物学・生命科学と言葉 季刊生命誌 通卷三十一号 十一月

「科学コミュニケーション」の提案——文化としての科学を共有するために—— シリーズ「市民社会と科学技術 (二)」(インタビュー) フロント 十二月

菊地 暁

柳田国男が希望だったころ——柳田論と民俗学の現在をめぐ
る極私的考察—— 「柳田国男の会」報告集 七 五月

「良き選挙民」と民俗学

京都新聞 九月二六日

●柳田国男と民俗学の近代——奥能登のアエノコトの二十世紀

吉川弘文館 十月

木島 史雄

『經典釋文』の變遷——「舜典」釋文諸本にみるその利用環
境 東方學報 京都第七三冊 三月

簠簋をめぐる禮の諸相——考古學／經書解釋學／金石學／考
證學——

京都大學人文科學研究所研究報告

「尚書正義定本」と漢字コード 漢字と情報 NO.3 十月
小南一郎編『中國の禮制と禮學』十一月

北垣 徹

万国博覽會と國際會議——サンシモン主義による知の組織
化 人文学報 第八四号 三月

●資料 權利の宣言——一七八九(共訳)

京都大學人文科學研究所共同研究資料叢刊 第六号 三月

社会ダーウィニズムとは何だったのか——一九世紀後半、フ
ランス 阪上・上野編『ダーウィン以降の人文・社会科
学』 京都大學人文科學研究所 三月

共和国における主体——シャルル・ルヌヴィエを中心として
第五二回関西社会学会大会報告要旨 五月

書評・『言語文化 特集：一九六八』他 Chronicle '60s no.
00 京都大學人文科學研究所 八月

ピエール・ジャネと観念の力

第五回精神医学史学会大会報告要旨 十月
海外文献紹介・エーランベール『自己であることの疲労』
精神医学史研究 vol.5 no.2 十月

五月革命 Chronicle '60s no.01

書評・ミユキエリ『社会的なものの発見』 デュルケーム
／デュルケーム学派研究会ニューズレター第二号 十二月

松本日之春作品展ヴァイオリン・チェロ・ピアノの夕べを聴
いて Chronicle '60s no.02

京都大學人文科學研究所 十二月

金 文京

大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」 東方學報 京都七十三 三月

貴州農村市場における書籍の伝播 森時彦編『中国近代の都
市と農村』 京都大學人文科學研究所 三月

京大人文研所蔵俗曲目錄稿 『中国における通俗文学の發展』

及びその影響」

科研補助金研究成果報告書（基盤研究B2） 三月
日本亡命後の胡蘭成——保田与重郎との関係を中心に（共著） 未名十九 三月

張象津『等韻簡明指掌図』訳注『明清時代の音韻学』

京都大学人文科学研究所 三月

文庫本『書劍恩仇録』解説

徳間書店 五月

南戯和南宋状元文化『南戯国際学術研討会論文集』

中華書局 五月

湯賓尹与晚明商業出版『晚明与晚清的文学芸術』

中央研究院中国文哲研究所（台湾） 六月

神話を発掘する敦煌変文

『週刊朝日百科』世界の文学 一〇一 七月

元雜劇『盆児鬼』考——しゃべるお碗の話

『説話論集』十 清文堂出版 七月

夏の夜の地獄めぐり

月刊しにか 十二一八 八月

諸宮調『董解元西廂記』における時間推移と季節表現

『古典学の再構築——第一期公募研究論文集』 八月

文楽と能 国立劇場第十三六回文楽公演パンフレット 九月

現代の言葉——大リーグ・コーヒー牛乳・花火大会・メルト

モ・イスラム教 京都新聞夕刊

桑山正進

序文 狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』

京都大学学術出版会 二月

●法顯傳・洛陽伽藍記・釋迦方志

西域行記索引叢刊 3（高田時雄共編） 松香堂 二月
馨華、順達、刹利、曷闍支

『石上教授古稀記念論集』 山喜房書林 五月

小南一郎

中国古典形成の第一期と第二期——周宣王の評価を中心にして『古典学の現在Ⅱ』

（科研費特定領域研究報告書） 二月

傀儡戯再考

桃の会論集初集 六月

●『曹植 王羲之 陶淵明』（編著）

週刊朝日百科、世界の文学 一〇四 七月

社・鬼神『中国思想文化辞典』 東京大学出版会 七月

●『中国の禮制と禮学』（編著）

朋友書店 十月

飲酒禮と裸禮『中国の禮制と禮学』

十月

王逸『楚辭章句』研究——漢代章句学的一个面向

中国文哲研究通訊 四四 十二月

佐々木 克

●江戸が東京になった日

講談社選書 一月

攘夷と国是の位相『近代日本における東アジア問題』

吉川弘文館 一月

●征西從軍日誌（監修・解説）

講談社学術文庫 三月

●幕末維新の彦根藩（編著）

サンライズ出版 三月

彦根藩の戊辰戦争（同書所収）

大老井伊直弼／八月一八日の政変／榎本武揚／自由民権運動

／第一帝国議會 N H K 教育セミナー——『歴史でみる日本』テキスト

『維新官僚』と『志士』の闘い

●明治維新の新視角（編著）

『再現日本史』 7 講談社 六月

大久保利通と囲碁の逸話（同書所収）

西郷隆盛と大久保利通の友情 『叢園』 一六八号 十二月

坂上 孝

●ダーウイン以後の・人文・社会科学（共編）

京都大学人文科学研究所 三月

研究者の組織化と科学のイデオロギー

『人文学報』 第八十四号 三月

坂本 優一郎

一八世紀のロンドン・シティとイギリス政府公債

西洋史学 三月

『資本主義世界経済（一九七九年）』、『世界経済の政治学』（一九八四年）

川北稔編著『知の教科書・ウォーラーステイン』

講談社 九月

高木 博志

京都のイメージはどのようにつくられたか——平安文化論の成立『伝統の都』の近代』

同志社大学人文科学研究所 一月

初詣、二〇世紀に広まった 朝日新聞夕刊 二月二日

官幣大社札幌神社と「領土開拓」の神学

岡田精司編『祭祀と国家の歴史学』 塙書房 四月

小学校になぜ桜の木が多い 歴史地理教育 四月

近代日本の文化財保護と古代美術（朝鮮語）

美術史論壇（韓国美術研究所）

皇室用財産を世界遺産に 京都新聞 六月八日

陵墓の近代——皇霊と皇室財産の形成を論点に——

篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』 柏書房 六月

世界文化遺産と日本の文化財保護史——陵墓と御物の非国際性—— 園田英弘編『流動化する日本の「文化」』

日本経済評論社 九月

日本の近代化と伝統の創出 『伝統』の創造と文化変容（パ

ルテノン多摩連続講演記録集）』 パルテノン多摩 十二月

近世の内裏空間・近代の京都御苑

岩波講座『近代日本の文化史』 第二巻 十二月

高 階 絵里加

●モニカ・ボーム・デュシェン シャガール（翻訳）

東の「間」西の「間」

『日本の美学』 三十三号 燈影舎 十月

ニューヨーク近代美術館名作展 門外不出級の傑作の数々

『新美術新聞』 十月十一日

高田時雄

紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會

東方學 一〇一輯 一月

●法顯傳・洛陽伽藍記・釋迦方志

西域行記索引叢刊 Ⅲ 松香堂 二月

トマス・ウェイドと北京語の勝利 狭間直樹編『西洋近代文

明と中華世界』 京都大学學術出版会 二月

●明清時代の音韻學

『西儒耳目資』以前——中國のアルファベット——『明清時

代の音韻學』 三月

ジュゼッペ・ロスとロス文庫

文學 隔月刊第二卷第三號 五月

有關吐蕃期敦煌寫經事業的藏文資料『敦煌文獻論集』 五月

瑠璃王經音義『東京大學所藏佛教關係貴重書展』 六月

イタリアにおける漢籍の蒐集(上)(下)

東方 二四四、二四五號 六・七月

京都から漢字文化の再生を

カトリック・ミッシヨンの言語戰略と中國 京都新聞 七月一日

文學 隔月刊第二卷第五號 九月

竹沢泰子

●「社会的構築物としての人種概念に関する理論的考察」平成

十一〜十二年度科学研究費補助金(C3)研究成果報告書

三月

“Comments on ‘Preserving Distinctiveness’ by Kotaro Naka-

no,” *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar*, Center for American Studies, Ritsumeikan University. 三月

書評論文「山田千香子著『カナダ日系社会の文化変容——

「海を渡った日本の村」三世代の変遷』

『民族学研究』 66(1) 六月

Book Review “The Politics of Fieldwork,” Lane Hirabayashi, *American Ethnologist* 28(3). 九月

「二〇〇一年度歴史学研究会大会報告批判」近代史部会

『歴史学研究』 757号 十二月

「アメリカ合衆国における二言語教育—最近の論争と効果的

教育モデル」『日系南米人の子どもの母語教育』KOBÉ

外国人支援ネットワーク編 創刊号 十二月

武田時昌

胎児の性別を推算する術——数の予言力 横山俊夫編『言語

力の諸相』 二〇〇〇年十二月

明治期の洋算と和算 狭間直樹編『西洋近代文明と中華世

界』 京都大学學術出版会 二月

‘Scientists’ language in modern Japan: a response to Pro-

fessor Jeon Sang-woon Kyoto Lecture on scientific

nomenclatures in modern Korea

人文科学研究所共同研究資料叢刊 第五号 三月

●週刊朝日百科 世界の文学 一〇二号 孔子、老子ほか——

思想家たちの饗宴(編著) 朝日新聞社 六月

田 中 淡

中国建築の知識は如何なる媒体を通じて日本に伝えられたか
——工匠、模型・図面、そして書籍—— 『考古学の学際
的研究——濱田青陵賞受賞者記念論文集——』

昭和堂 十月

田 中 雅 一

Hindusm in Singapore : Ethno-nationalization in Process
In Junji KOIZUMI ed. *Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim*, Osaka : Osaka University.

一月

英国における実用人類学の系譜——ローズ・リヴィングスト
ン研究所をめぐって 『人文学報』 八四号 三月

新世紀のフィールドワーク 『地域研究スベクトラム』

アジア・アフリカ地域研究科 第六号 三月

軍隊における聖職者の役割——在日米軍における従軍牧師の
研究を中心に 『平成十一年度研究・活動助成報告集』 第
九卷 財団法人庭野平和財団 三月

マードック『社会構造 核家族の社会人類学』 山田昌弘編
『Best Selection 家族本40』 平凡社 四月

●翻訳 ルイ・デュモン著『ホモ・ヒエラルキクス——カース
ト体系とその意味』（共訳） みすず書房 六月

書評 大越愛子他『フェミニズム的転回』 白澤社

『アソシエ』 一〇月号 九月

オキナワ・バトル・サイト・ツアー

『まほら』旅の文化研究所 二九号 十月
新世紀考 暴力4 〈民族〉や〈文明〉を語る危うさ
『京都新聞』朝刊 十月

田 中 祐理子

主題としての「臨床」——臨床経験の人間学的寄与について
臨床死生学 六卷 十二月

堂 山 英次郎

Rgveda I 82—"Das neueste Lied" und die 1. Sg. Kon-
junktiv——『印度學佛教學研究』四九卷第二号 三月

富 永 茂 樹

●資料 権利の宣言——一七八九（編）

会話と議論——一八世紀フランスにおける社交の衰退 三月
和也編『コミュニケーションの社会史』 京都大学人文科学研究所
前川

ラントナス、あるいは自由と健康の逆説について ミネルヴァ書房 八月

革命記念 一九八九年から一七九〇年へ 三浦信孝編『普遍
性か差異か 共和主義の臨界、フランス』 環 第七号 十月
藤原書店 十二月

富 谷 至

謎とロマンの楼蘭 その謎にせまる

毎日新聞 夕刊 二月二三日

●流沙出土の文字資料

スウェーデン国立民族学博物館所蔵未発表紙文書 富谷至編

『流沙出土の文字資料』

三世紀から四世紀にかけての書写材料の変遷——楼蘭出土文

字資料を中心に 富谷至編『流沙出土の文字資料』 三月

晋泰始律令への道——魏晋の律と令

東方学報 京都 七三冊 三月

偽造文書をあばく

月刊言語 三〇巻八号 七月

漢代穀倉制度

国際簡牘学会会刊 第三号 七月

浮遊する二〇〇〇年前の靈魂

月刊しにか 一二巻八号 八月

秦漢二十等爵制和刑罰的減免

『簡帛研究』 二〇〇一 九月

二十一世紀的秦漢研究

『簡帛研究』 二〇〇一 九月

中 西 裕 樹

A Preliminary Report on She Language 池田巧編『論

集：東・東南アジアの少数言語の現地調査』 三月

藤 井 正 人

祭式と輪廻——古代インド再生説の展開——

人文 第四八号 三月

The Brahman Priest in the History of Vedic Texts. In: K.

Karttunen & P. Koskikallio (eds.), Vidyāmavandanam: Essays in Honour of Asko Parpola, Studia Orientalia 94, Helsinki, 2001. 八月

前 川 和 也

●コミュニケーションの社会史（編著）

ミネルヴァ書房 八月

水 野 直 樹

国籍をめぐる東アジア関係——植民地期朝鮮人国籍問題の位

相——古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア問題』

吉川弘文館 一月

「第三国人」ということばの誤解

『グローブ』 No.24（世界人権問題研究センター） 一月

「第三国人」という言葉の起源を考へる

『朝鮮史研究会会報』 第一四二号 一月

韓国は国家的事業で公文書を公開 毎日ムック・PC倶楽部

編『インターネット 読む・学ぶ・調べる』

毎日新聞社 二月

コミンテルンの朝鮮共産党承認をめぐる（共同研究「コミンテルンと朝鮮」の一部）

『青丘学術論集』 第一八集 三月

（人権ゆかりの地をたずねて38）在日大韓基督教京都南部教会 『きょうと府民だより』 第二四一号 五月

朝鮮植民地支配と名前の「差異化」

『社会と歴史』 第五九輯 (ソウル、韓国社会史学会編、

文学と知性社発行、朝鮮文) 五月

教科書問題をめぐるシンポジウムから——次代に歴史をどう伝えるか
『京都新聞』 七月二三日

歴史教科書問題・「つくる会」教科書はまったく不適当

『季刊 Sai』 Vol. 40 九月

日本の朝鮮民族関係歴史資料——延辺朝鮮族関係資料を中心に—— 第一回朝鮮民族文献学術討論会論文集『二一世紀朝鮮民族文献の発掘と研究』(中国・延吉市、朝鮮文)

九月

朝鮮独立運動、東北抗日連軍、浮島丸事件、金天海、崔南善
新幹会、祖国光復会、白頭山、李東輝の項目『角川世界史辞典』
角川書店 十月

●『朝鮮総督諭告・訓示集成』全6巻・別冊(編集・解説)
緑蔭書房 十月

植民地支配と歴史認識(一九九六年度講演)『一九九六年度』
一九〇〇一年度 講演録集』

大阪市外国人教育研究協議会 十月

●日本の植民地支配——肯定・賛美論を検証する——(共編)
(岩波ブックレット No. 552) 岩波書店 十一月

植民地支配と名前——朝鮮支配初期の「名前」政策について
の研究ノート——

『二十世紀研究』 第二号 二十世紀研究編集委員会

(京都大学文学部現代文化学共同研究室内) 十二月

麥谷 邦夫

道家・道教と気 『中国思想文化事典』

東京大学出版会 七月

貴無論と崇有論 『中国思想文化事典』

東京大学出版会 七月

中国思想研究者のためのインターネット資源簡介

中国思想史研究 二二三 七月

村上 衛

新刊紹介・新村容子『アヘン貿易論争——イギリスと中国

史学雑誌 第一一〇編第八号 八月

森 時彦

●中国近代の都市と農村(編著)

京都大学人文科学研究所研究報告 三月

武進工業化と城郷関係 森時彦編『中国近代の都市と農村』

京都大学人文科学研究所 三月

●中国近代綿業史の研究

京都大学学術出版会 四月

守岡 知彦

UTF-2000 プロジェクト

漢字と情報 第二号 三月

文書編集系における文字コード(錦見美貴子・戸村哲・半田
剣一・高橋直人と共著)『別冊「インターネット時代の

文字コード」

第九章 四月

インターネットメッセージにおける文字表現 別冊「イン

ターネット時代の文字コード」 第十五章 四月

"A Short Introduction to UTF-2000 Project", the First TEI Character Set Issues Working Group Meeting, University of California, Berkeley, USA. 十月

森本 淳 生

Du schématisme à l'imaginaire — quelques remarques sur le problème de l'image chez Valéry —

ヴァレリー研究 第二号 五月

近代の表裏——ヴァレリーとブルトン 宇佐美齊編著『アヴァンギャルドの世紀』

京都大学学術出版会 十一月

翻訳・ビエール・ドウヴォー「音楽のアヴァンギャルド」

『アヴァンギャルドの世紀』 十一月

安岡 孝 一

Digital Rubbings — Their Past and Future (共著) 2001 Pacific Neighborhood Consortium 一月

フォント埋め込みによる外字手法 京都大学大型計算機センター第六十七回研究セミナー報告 三月

●インターネット時代の文字コード(共編) 共立出版 四月

分散メモリ型ベクトル並列計算機上での高速整数ソーティング アルゴリズムの実装(共著)

情報処理学会論文誌 Vol. 42 No. SIG9(HPS3) 八月

日本における最新文字コード事情(前編)

システム／制御／情報 Vol. 45 No. 9 九月

大漢和辞典とISO 10646 全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ No. 11「人文社会情報とIT」

日本における最新文字コード事情(後編) 十一月

システム／制御／情報 Vol. 45 No. 12 十二月

山 室 信 一

二十一世紀に読む一冊——柳田国男『明治大正史——世相篇』

『二冊の本』 第六卷一号 一月

●近代日本における東アジア問題

吉川弘文館 古屋哲夫と共編 一月

近代東アジア世界の形成と思想連鎖

東洋史苑 第五七号 三月

討論・アジアの統治システム 『第五回静岡アジア・太平洋学術フォーラム記録集』 八月一三、一四、一五日

新聞時評 毎日新聞 九月十一日

新聞時評 毎日新聞 十月九日

●近代日本の東亜区域構想

台北・中央研究院東亜区域研究 十一月

新聞時評 毎日新聞 十一月六日

新聞時評 毎日新聞 十二月四日

●思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企

岩波書店 十二月

帝国と民族 『二十世紀の定義 4 越境と難民の世紀』

岩波書店 十二月

山本有造

日本植民地帝国と東アジア 古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア問題』 吉川弘文館 一月
選評・松本俊郎『満洲国』から新中国へ——鞍山鉄鋼業からみた中国東北の再編過程 一九四〇—一九四五——」 日本経済新聞 十一月三日

横山俊夫

新しい京都学を創る(京都市国際交流会館桑原武夫記念室開設十周年記念シンポジウム記録/竹内實・宇佐美齊・冷泉貴美子・熊谷真菜各氏と)(企画・編集) 一月

創造する市民 第六十六号 京都市生涯学習振興財団 一月
Culture of Japan: Spinning Tops: Toys of Universal Provenance, *Sumitomo Quarterly*, winter 2000/2001, No. 83 (監修・校訂) 一月

世界に開く関西新世紀(北岡伸一・石井淳蔵両氏と鼎談)

「縁」 九八号 関西電力株式会社 一/二月

いのちのかたちの歴史をもとめて「フォーラム 二二世紀の西洋史学」 西洋史学第二〇〇号 日本西洋史学会 三月

● A Prelude Symposium for Future Seoul Kyoto Symposium on Language Problems in the Modern Sciences at Seoul National University, 2nd 4th February, 2001 — an interim report/co-odotorship with Yung Sik Kim, Occasional Seminar Reports of the Institute for Research in Humanities, No. 5, The I. R. H., Kyoto University 三月

人文・社会科学の新しいパラダイムを求めて(川島昭夫・佐伯啓思・田邊玲子・高橋義人各氏と座談) 人環フォーラム 創立一〇周年記念号 京都大学大学院人間・環境学研究科 三月

● 生物のかたちと数理——近藤滋氏との対話——、平成十二年度教育改善推進費研究報告書/自然学・人間学の教育の体系化・今西錦司生誕百年記念事業、代表松沢哲郎、研究報告別冊(加藤和人氏と共編) 京都大学霊長類研究所 三月

Culture of Japan: The Simplest Literary Form of All: Haiku, *Sumitomo Quarterly*, spring 2001, No. 84 (監修・校訂) 四月

とうんばらー通信 第十八号 科学研究費補助金/基盤研究(A)(1)「近代久米島文化の復元」(編集) 五月

京都大学人文科学研究所横山研究室 五月十日

天地人和案をもとめて(第四十九回全日本広告連盟京都大会プログラム) 全日本広告連盟 六月六日

とうんばらー通信 第十九号 科学研究費補助金/基盤研究(A)(1)「近代久米島文化の復元」福建調査特集(編集) 六月十三日

京都大学人文科学研究所横山研究室 六月十三日

Culture of Japan: At the Cutting Edge of Cutlery: Japanese Knives, *Sumitomo Quarterly*, summer 2001, No. 85 (監修・校訂) 七月

とうんばらー通信 第二十号 科学研究費補助金/基盤研究(A)(1)「近代久米島文化の復元」(編集) 七月

京都大学人文科学研究所横山研究室 九月二十日

京都大学人文科学研究所横山研究室 十二月二五日

よみがえる日本文明——江戸期日本のいのちのかたちを考え
る

「WEDGE」 Vol. 13, No. 10 十月

Culture of Japan: Meaning with Wood and Paper: Shoji
and Fusuma, *Sumitomo Quarterly*, autumn 2001, No. 86

(監修・校訂)

十月

「在野の歴史家萩原延壽氏が目指したもの」(談)

朝日新聞(全国版) 十月二八日

「半半會だより」 第六号 (黒坂絃一氏と共編)

半木半読会 十一月一日

提言(右記「半半會だより」所収)

十一月一日

熱い出会い「学びのあゆみ二十年」 京都市生涯学習総合セ

ンター 京都市図書館 (財)京都市生涯学習振興財団 設

立二十周年記念誌

同誌編集委員会 十一月

「京都大学地球環境学大学院 地球環境学・地球環境学

舎・三才学林」(共同制作冊子)

京都大学 十二月

礼儀作法と日本文明——むかしの日用百科、『節用集』と

『大雑書』の世界から——(講演記録)

醫道顕彰会 十二月

世界遺産と月 二〇〇二年カレンダー・木田安彦ガラス絵の

世界(共同企画、前文、図版解説)

前近代の久米島文化(談)

松下電工株式会社 十二月

とうんばらー通信 第二十一号 科学研究費補助金／基盤研

究(A)(1)「前近代久米島文化の復元」(編集)

人

文

第四九号

二〇〇二年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品